

京都府埋蔵文化財情報

第138号

継体大王と南山城	小池 寛	1
共同研究 丹波地域における瓦器椀の地域性	山本 梓・引原茂治	9
研究ノート 擬凹線文土器様式の解体—浅後谷南式の再検討—	桐井理揮	15
研究ノート 古墳築造終焉後の環状瓶(下)	名村威彦	25
資料紹介 法成寺跡出土の甲冑について	加藤雄太・山本尚人	34
令和元年度発掘調査略報		40
9. 川向遺跡第2次・川向南古墳群	10. 満願寺跡第2次	
11. 菖蒲谷口遺跡	12. 犬飼遺跡第4次	
13. 犬飼遺跡第5次	14. 金生寺遺跡第5次	
15. 平安京跡(平安京左京一条三坊三町)	16. 長岡京跡右京第1201次・開田遺跡	
17. 美濃山遺跡第9次	18. 小樋尻遺跡第8次	
19. 小樋尻遺跡第9次	20. 水主神社東遺跡第12次	
21. 水主神社東遺跡第13次		
長岡京跡調査だより・134		59
現地公開状況・普及啓発事業(令和2年度上半期)		61
センターの動向		62

2020年8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

継体大王と南山城

小池 寛

1. はじめに

全長68kmの大和川は、奈良盆地の中央東部丘陵に端を発し、古市古墳群の北方を河内潟に流れ込んでいる。流域には、纏向遺跡をはじめ、葛城氏の拠点である南郷遺跡群や物部氏の拠点である布留遺跡などが所在し、首長墓群である佐紀古墳群や大和・柳本古墳群、馬見古墳群なども所在する。また、河内地域では、ヤマト王権が管理する鉄生産の拠点である大県遺跡や首長墓が数多く築造された古市古墳群などが所在しており、古墳時代前期から中期までの権力基盤を下支えした地域こそが大和川流域であったといえる。

一方、古墳時代中期以降は、琵琶湖から瀬田川を経て宇治川から巨椋池に至る宇治川流域と丹波から乙訓を南流する桂川流域、そして、南山城を貫流する木津川流域とそれら三河川が合流する淀川流域に、主要な宮や首長墓、生産拠点が造営されることとなる。

本稿では、中国と朝鮮半島の政治的な動向を踏まえ、倭と大陸との交流とそれによってもたらされた新たな技術について概観し、権力基盤が大和川流域から淀川流域へと移行する段階における南山城の歴史的位置づけについて考えていきたい。

2. 中国及び朝鮮半島の政治的動向

中国前漢は、紀元前206年に劉邦により建国され、一時「新」王朝の成立をみるが、光武帝により25年に後漢が建国される。おおむね日本の弥生時代に相当するこれらの時代は、比較的、平穏な時代であったといえる。しかし、後漢時代後半に当たる184年には黃巾の乱、208年には赤壁の戦いが勃発し、220年魏建国、221年劉備により蜀建国、222年孫權による吳が建国される。三国時代の動乱期を経て、いわゆる魏晋南北朝が到来する。この動乱期は、統一王朝である隋王朝が成立する581年までの300年間続き、中国は大いに疲弊する。

一方、この動乱に端を発し、朝鮮半島においても高句麗をはじめ、連合体である馬韓が百濟、辰韓が新羅、弁韓が伽耶連合へと政治的結束を強めていく。この三国時代は、中国の動乱期とほぼ同時期であり、668年の統一新羅時代が到来するまで継続される。中国と同じく朝鮮半島も大いに疲弊することとなる。

このように東アジアにおいて、動乱が長期にわたって勃発する背景には、日本尾瀬ヶ原のハイマツ花粉が急増することなどから、3世紀から8世紀に起きた急激な寒冷化が地球規模で起こり、農業生産量の著しい低下を招いたことと関連する可能性が指摘されている。この時期、東アジアでは、民族移動による中国大陆の動乱に端を発し、その余波を受けた朝鮮半島や倭も大きく乱れ

る。このような動乱は、ゲルマン民族大移動によるローマ文明の滅亡など、世界的に勃発しており、気候変動による農業生産量の減少が、政治経済に及ぼす影響がいかに大きかったかを示している。

倭においても後に述べるように朝鮮半島との頻繁な外交の基層には、このような気候変動に端を発した動乱があったことを忘れてはならない。

3. 倭と中国・朝鮮半島の動態

倭が初めて中国史書に登場するのは、前漢時代(前202～)である。倭の朝貢は、前漢が朝鮮半島に進出し、樂浪郡(前108～313年)、真番郡(前108～前82年)、臨屯郡(前108～前82年)、玄菟郡(前107～107年)の朝鮮四郡を設置した政治的動向と連動しており、実態的には樂浪郡と交渉する程度であったと推定される。後漢時代(25年～)には、中国の首都洛陽と直接通交する小国が倭に出現する。倭奴國は、57年に朝貢して「漢倭奴國王」を印綬する。後漢衰退後、邪馬台国により国内は平定され、卑弥呼は、三国時代魏に朝貢し、親魏倭王に封じられる。240年以後、邪馬台国は、朝鮮半島の帶方郡(204～313年)を媒介として魏と通交する。その後、壱与は、引き続き西晋に朝貢する。しかし、五胡十六国の蜂起により、華北が大いに混乱すると、中国との交渉は途絶え、4世紀の中国史書以降、倭に関する記述は見られなくなる。それ以後の倭は、中国ではなく朝鮮半島との通交が主流となる。^(注2)

一方、5世紀を中心とする仁徳・履中天皇などの倭の五王(讚・珍・濟・興・武)は、中国南朝に朝貢し、官号を得るが、502年以降の100年間、再び南朝との通交は途絶える。反面、朝鮮半島に関する記述が日本書紀に多く見られるようになる。

古墳時代前期から全国的に築造が始まる前方後円墳は、このような中国や朝鮮半島の動乱に対抗すべく、急速に政治体制を整えた結果として理解されることが多い。

4. 日本書紀にみる対外交渉

日本書紀による5・6世紀の天皇在位年数は、仁徳天皇(313～399年)が87年、允恭天皇(412～453年)が42年、雄略天皇(456～479年)が24年、繼体天皇(507～531年)が25年、欽明天皇(539～571年)が33年、敏達天皇(572～585年)が14年であり、37年間在位した推古天皇(592～628年)に至る18代の天皇の内、11代の天皇在位年数は10年以下である。この在位年数を念頭におき、日本書紀に記述された中国・朝鮮半島関係の記事をみておきたい。

垂仁天皇(前97～30年)2年「任那・新羅抗争」、神功皇后(539～571年)9年「新羅出兵」、仁徳天皇(313～399年)53年「新羅・蝦夷紛争」、顯宗天皇(485～487年)3年「任那・高麗と通行」の記事がわずかに散見できる。一方、雄略天皇(456～479年)5年「鳴王(百濟武寧王)誕生」、7年「今来才枝」、8年「高麗軍撃破」、9年「新羅征伐」、20年「高麗による百濟滅亡」の5記事が見られ、繼体天皇(507～531年)6年「任那四県割譲」、7年「己汝・帶沙抗争」の記事が見られる。雄略・繼体大王の対外交渉の記事数が、それ以外と比べ多いことがわかる。

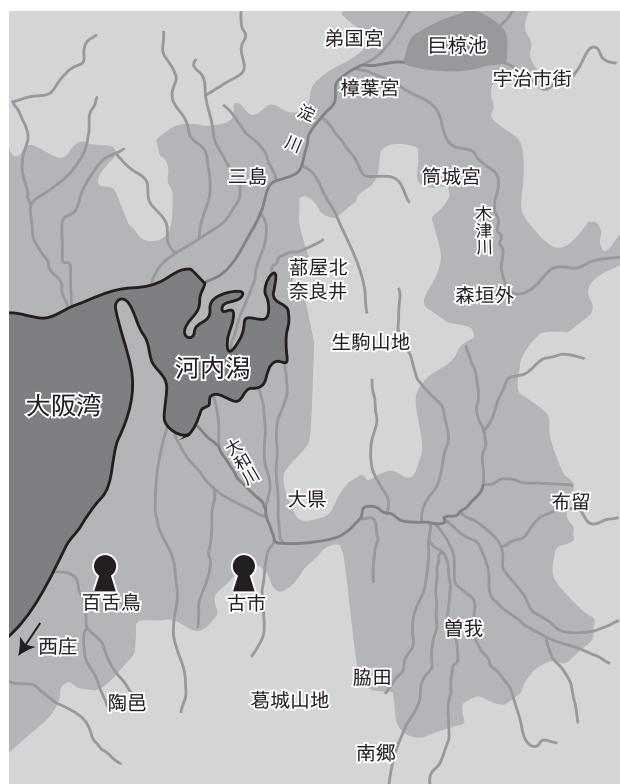
このように5世紀中葉～6世紀中葉は、まさに朝鮮半島との交渉が頻繁に行われたことを示しており、同時期の集落遺跡や古墳の調査成果にも、自ずと多くの朝鮮半島系、特に、伽耶や百濟系の要素が多く見られる。

5. 繼体大王と淀川水系

笠置山脈を発源とする全長68kmの大和川は、奈良盆地中央から河内古市古墳群の北側を河内潟まで流れる。奈良盆地の小河川の全てが大和川に流れ込んでおり、大和朝廷の所在地に近い脇本遺跡や葛城氏の拠点集落遺跡である南郷遺跡群、物部氏の拠点集落遺跡である布留遺跡なども流域に所在し、首長墓が数多く築造される佐紀古墳群や大和・柳本古墳群、馬見古墳群も流域内に位置している。さらに、河内地域でも大和朝廷が管理する鉄生産拠点である大県遺跡や古市古墳群などが流域に所在しており、古墳時代前期から中期初頭までの権力基盤を下支えした河川こそが大和川であったといえる。

しかし、雄略・繼体大王以降、琵琶湖から瀬田川を経て宇治川～巨椋池に至る宇治川流域と丹波から乙訓を南流する桂川流域、そして、南山城を貫流する木津川流域とそれら三河川が合流する淀川流域に、主要な宮と首長墓が築造されることとなる。特に、京都府南部に位置する南山城地域は、大和地域に隣接し、東海・近江・山陰地域・山陽地域への経路上にもあることから、交通の要衝の地として重要視されたと考えられる。古墳時代初頭の墳丘墓である城陽市芝ヶ原古墳や同長池古墳、古墳時代前期の首長墓である椿井大塚山古墳の存在は、ヤマト王権における南山城地域の重要性を示している。一方、古墳時代後期には、繼体大王が現在の京田辺市に筒城宮を造営するなど、さらに、重要度は高まったと考えられる(第1図)。

大和川流域から淀川流域に政権基盤が移行する要因については、繼体大王が天皇家の傍系であり、出自・血縁が希薄なため、大和磐余玉穗宮への入宮を承諾しない勢力の存在があったとする説や淀川水運を整備する目的で樟葉宮(507年)、筒城宮(512年)、弟国宮(524年)を築き、さらに、三島古墳群を築造したとする説などがあげられる。何れにしても、ヤマト王権の支配領域が、淀川に重きをおきながら、広範囲に及んだことを示している。



第1図 古墳時代における畿内主要生産遺跡概念図

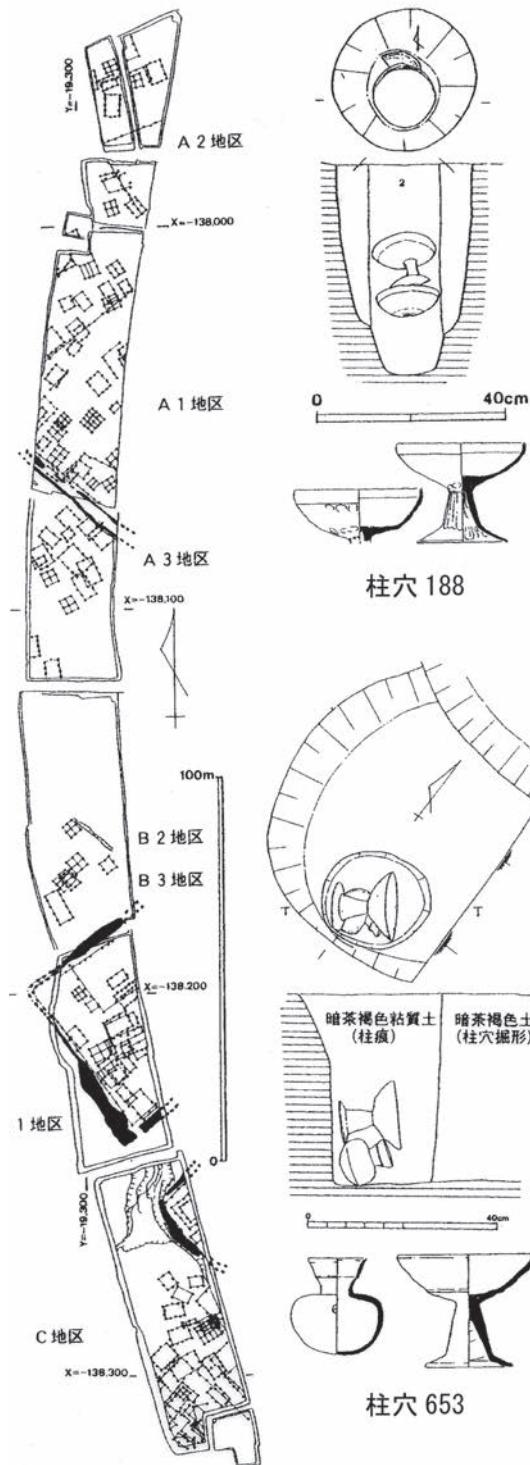
6. 「今来才伎」によってもたらされた文物

雄略天皇(456~479年)7年に「今来才伎」の記載がある。今来とは「渡来」、才伎とは「知識・技術」を意味する。まさに、中国に端を発した政治的動乱を避けるように渡來した技術者集団のことを指している。具体的には、高句麗系の高麗(伯)氏や新羅系の秦氏、百濟・伽耶系の漢氏を指し、時には天皇の側近として重用された。5世紀頃に渡來した今来才伎集団は、文字や五経、土木技術、建築技術をはじめ、航海技術や鉄器生産、織物、金工、窯業、馬匹生産などを我国に

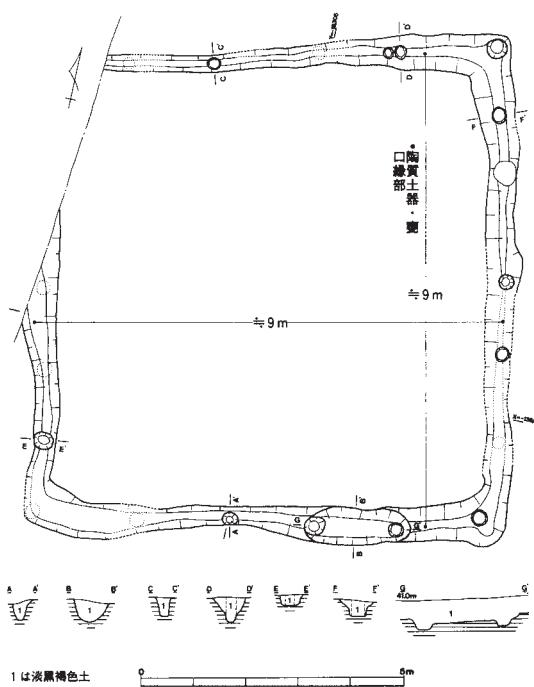
伝えたとされる。以下、南山城地域で確認された事例を中心に新たにもたらされた技術について概観しておきたい。

(1) 居住施設としての掘立柱建物

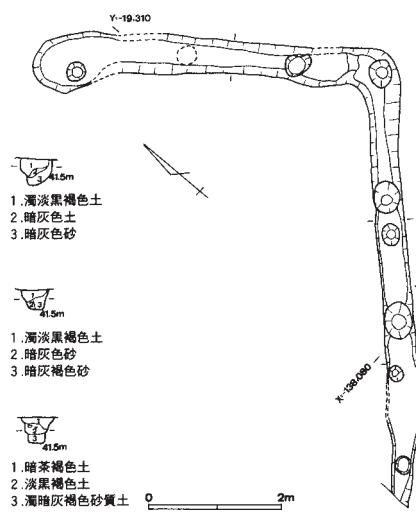
古墳時代後期の居住施設は、一般的に竪穴住居が主流であるが、渡來人が参入した集落遺跡では、掘立柱建物(第2図)が主流であることが多い。それに伴い柱穴に完形品の土器を埋納する地鎮も見られる。精華町森垣外遺跡で確認された柱穴188(第2図)では、柱の抜き取り痕に脚部を打ち欠いた土師器高杯を正位置で埋納し、同型式の完形品の高杯をその直上に埋納している。高杯自体が宗教性の強い器であることから、建物を解体した直後の宗教的行為と考えられる。一方、柱穴653(第2図)では、柱の抜き取り痕か



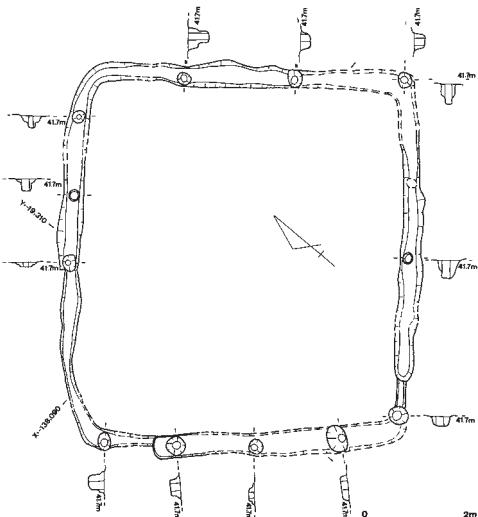
第2図 森垣外遺跡



第3図 森垣外遺跡大壁住居跡639実測図



第4図 森垣外遺跡大壁住居跡143実測図



第5図 森垣外遺跡大壁住居跡585実測図

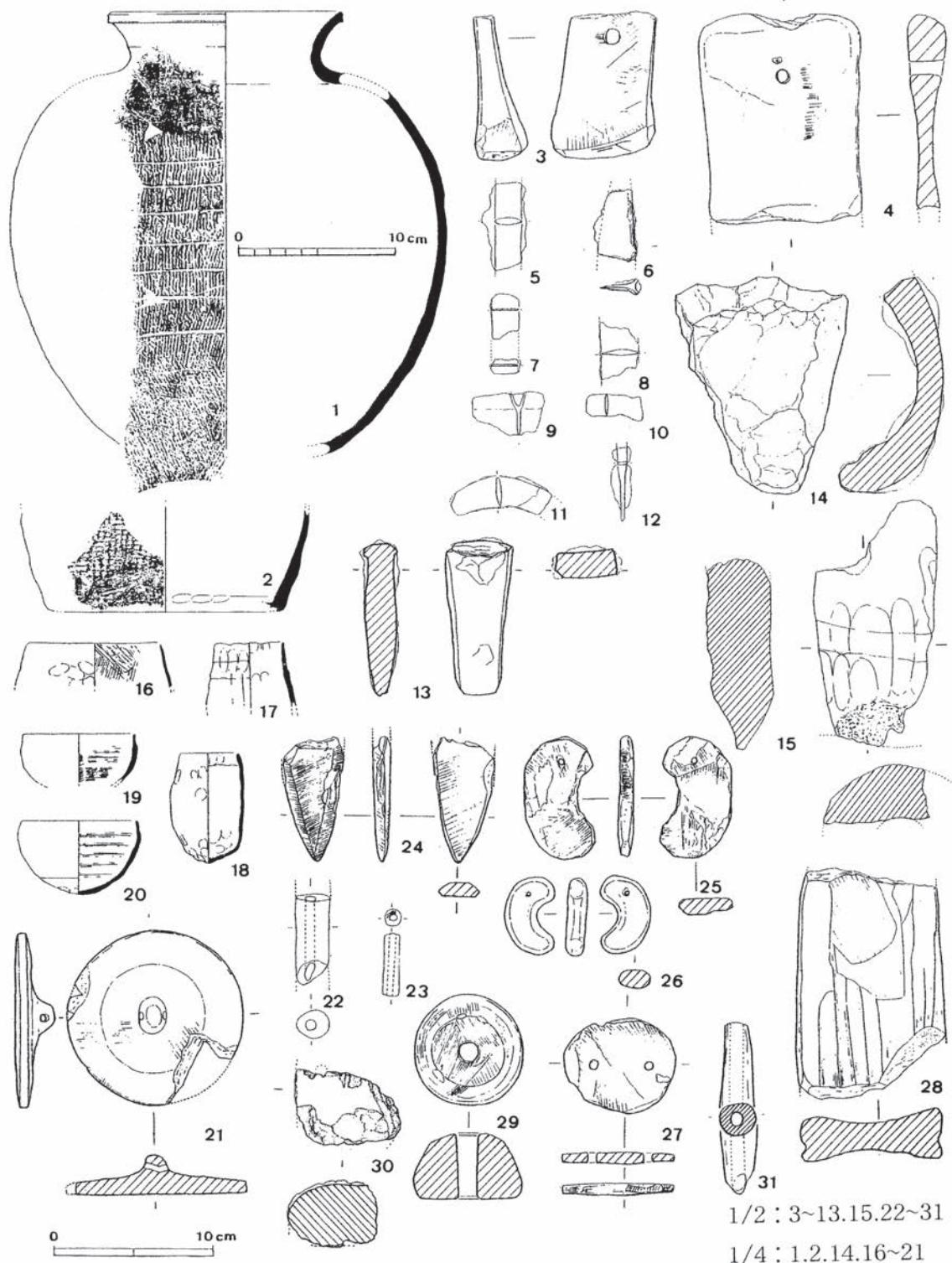
ら陶邑古窯址群で焼成されたTK216型式の壺を横位で据え、その直上に土師器高杯を横位で埋納している。宗教性の強い壺と高杯の出土から、建物解体時に執行された宗教的儀礼の内容を具体的に推測するうえで重要な検出例である。一方、建物に使用する柱材は、伐採後に強度を高める目的で一定期間、水漬けにする必要がある。森垣外遺跡においても湧水する貯木用の土坑や流路内からも柱材が出土している。掘立柱建物が主流である集落遺跡に共通する施設と考えられる。

一方、森垣外遺跡では数多くの掘立柱建物のなかにあって、正方形ないし長方形の溝内に等間隔に柱を建て、壁土で塗り上げる大壁住居を3棟検出している。大壁住居跡639(第3図)は、一辺9mを測り、床面積は81m²である。床面から陶邑古窯址群TK23~47型式の須恵器が出土している。一方、大壁住居跡143(第4図)は、北隅の溝が連接しておらず、北東辺5.5m、南西辺7mの溝で区画され、1.8m間隔で溝内に柱穴が穿たれている。大壁住居跡585(第5図)は、南西辺6.5m、北西辺7mの溝で囲まれ、1.5m間隔で溝内に柱穴が穿たれている。床面積は46m²である。

森垣外遺跡で検出した大壁住居跡は3棟であるが、居住施設である掘立柱建物群から隔絶されて存在するのではなく、混在していること、そして、溝と堤、柵で囲繞された首長居館を2ヶ所で検出(第2図左)していることから、首長居館以外の使途を集落遺跡ごとに考えていく必要がある。大壁住居は、中国陝西省西安に所在する新石器時代の集落遺跡である半坡遺跡や韓国公州延止山遺跡などにおいても確認される中国起源の住居形態である。5世紀後半に造営された大壁住居は、南山城地域では確認されていない。

(2) 鉄器生産

鉄器生産は、農業生産力や土木灌漑技術の向上に加え、馬の生産と相まって、戦争のあり方を大きく変えるなど、国家を形成するうえで重要である。鉄素材は、朝鮮半島から鉄鉱として搬入される。奈良県大和6号墳から多量の鉄鉱が出土する一方、韓国福泉洞古墳群に見られるように墓壙底面に買地券として鉄鉱が敷き並べられた事例もある。鉄器生産は、ヤマト王権が直接的に柏原市大県遺跡や交野市森遺跡などを造営する一方、葛城氏南郷遺跡や物部氏布留遺跡においても生産された。森垣外遺跡においても鉄製品と共に焼土坑や楕円形溝、轍の羽口、多量の鉄滓が出



第6図 森垣外遺跡出土遺物実測図

土している。それに加え、板状・棒状の砥石の出土は、当該時期における鉄製品管理と深く関係するものであり、南山城地域における古墳時代中後期の事例としては初出である。

(3)馬の生産

魏志倭人伝に、倭には「牛馬なし」との記述がある。馬は、朝鮮半島から準構造船で瀬戸内を経由し、河内潟南部の四條畷市藤屋北遺跡などの良好な牧に運搬され、各地へ供給された。良好な馬の生産と馬そのものの統率をはかるため、選別された雄馬以外の睾丸を切除する去勢が行われ、飼育に必要な塩も確保された。森垣外遺跡では、馬の下顎骨を埋納する土坑が確認され、多量の製塩土器が出土している。出土した製塩土器には、和歌山市紀淡海峡西ノ庄遺跡から搬入された貝殻条痕をもつ鉢形の製塩土器や大阪湾沿岸などからの搬入品が数多く出土している。なお、生産された馬は、四條畷市藤屋北遺跡などから京阪奈丘陵を越え、森垣外集落に搬入されたと考えられる。下顎骨埋納坑は、当該集落で馬の飼育が行われていたことを示している。

(4)陶質土器と須恵器生産、石製模造品生産

須恵器は、朝鮮半島の陶質土器に起源がある。京田辺市稻葉遺跡からは、硬質焼成の甌の把手が1点出土している。把手上面中央にヘラ工具によるスリットが入っている。このスリットは、陶質土器の祖型である朝鮮半島の瓦質土器に起源が求められる。元来、瓦質土器の壺には、2本の角状の粘土棒を貼付け、その先端を接合し、壺の体部両サイドに把手として付けられた。その後、徐々に1本化し、痕跡器官としてスリットが入るようになる。稻葉遺跡の土器は、韓式系土器の範疇で捉えることができるが、わずか1点の出土であるため、渡来人の参入までは言及できない。^(注5)一方、宇治市街遺跡では、溝から在地の土器と共に、韓式系土師器や陶質土器、初期須恵器が木製品とともに出土している。木製品の年輪年代から西暦389年の年代が得られ、外来系土器や初期須恵器の年代を考える上で重要な事例となった。^(注6)一方、木津川市上狛北遺跡では、古墳時代中期後半から後期前半の土坑から朝鮮半島の陶質土器・甌が出土している。体部には、席のような縄目叩き目が残り、螺旋状の沈線が施されていることから縄蓆文土器と呼ばれる。また、竪穴住居には「L」字形に曲がる煙道があることから、住居にも渡来系の要素がみられる。^(注7)一方、森垣外遺跡では、縄蓆文と螺旋状沈線を有する陶質土器甌や無文の叩き板で成形し、内外面を丁寧なナデによって整形した陶質土器甌のほか、斜格子や正格子叩き目をもつ土師器甌や甌などのいわゆる韓式系土師器も数多く出土している。

森垣外遺跡では、朝鮮半島系の遺物とともに伝統的な祭祀に使用される石製品の生産を示す滑石未製品や破片が出土している。これらの石製模造品は、緑色を呈しており、紀ノ川流域で産出される滑石の特徴を有している。

また、紀淡海峡に所在する製塩遺跡である西ノ庄遺跡産の製塩土器や和歌山沿岸で採集されたと考えられる軽石などが交易品として森垣外遺跡に搬入されている。なお、森垣外遺跡に近接する精華町柿添遺跡からも緑色の滑石製模造品が少量出土しており、森垣外遺跡で生産された石製品が分配されたことを示している。

7.まとめ

古墳時代前期から中期前半までは、大和川水系に首長墓群が築造され、流域には葛城氏南郷遺跡や物部氏布留遺跡なども所在している。しかし、繼体大王は、淀川水系に樟葉宮、筒城宮、弟国宮を造営し、政治的基盤を整備し、その結果、三島古墳群が築造される。そして、最終的には大和磐余玉穂宮へ入宮を果たす。南山城地域において筒城宮の造営が、政治的な変革を表す重要なメルクマールである。

一方、精華町「下狛」と山城町「上狛」という地名自体から渡来文化と深く関係することが古くから指摘されている。その中にあって精華町森垣外遺跡は、相楽郡下狛に所在し、遺構・遺物とともに今來才伎の参入が確実視できる遺跡である。特に、大壁住居639・143・585は重要である。大壁住居は、中国や韓国でも確認されており、大陸起源の居住施設として認識できる。また、森垣外集落は、繼体大王の筒城宮造営以前に成立するものの、首長居館の囲繞施設一辺50mの溝が、筒城宮の造営とほぼ同時期に埋められ、その上に竪穴住居が建てられている。おそらく、筒城宮の造営にあたり、それ以前からの生産拠点であった森垣外集落を政治的に解体し、その機能を筒城宮に統合したことを示すのであろう。樟葉宮や筒城宮、弟国宮を転々と造営する大きな目的の1つとして、それぞれの地域の政治的再編を強く意図したのではないだろうか。

以上のように、南山城地域において朝鮮半島との関係がある繼体朝の集落遺跡は、河内や大和と比較しても僅かである。しかし、南山城地域南部では、繼体朝より遡る仁徳朝において渡来人である箇木韓人が綴喜郡に居住した記事がみられる。また、欽明天皇31(570)年、高句麗からの国家的な公式使節を山背の高槻館に滞在させ、さらに、相樂館で饗宴を行ったことが記載^(注8)されている。一方、南山城南部に位置する木津川市や精華町には上狛・下狛・狛田のように高句麗との関係を示す地名があり、飛鳥時代には南山城地域で最古の高麗寺が造営されている。

かつて繼体大王は、朝鮮半島の通交をより円滑にすすめるために大和川流域から淀川流域に政権の基盤を移した。この政治的变化の影響が、その後の南山城地域南部の地域的特色として、今に伝えられていることを改めて評価すべきである。

(こいけ・ひろし=当調査研究センター調査課長)

- 注1 坂口 豊『尾瀬ヶ原の自然史』中央公論新書 1898
 - 注2 布目潮渕・山田信夫編『東アジア史入門』法律文化社 2000
 - 注3 和田 萃「繼体の擁立基盤」(『日本の歴史2』小学館) 1988
 - 注4 森垣外遺跡発掘調査報告は、当調査研究センター刊行『京都府遺跡調査概報』第1次(第77冊・1997)、第2次(第86冊・1999)、第3次(第91冊・2000)、第4・5次(第96冊・2001)に所収している。
 - 注5 京田辺市教育委員会「稻葉遺跡第4次発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第24集) 1998
 - 注6 金 一圭「陶質土器の観点からみた初期須恵器の年代」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集 国立歴史民俗博物) 2011
 - 注7 上狛北遺跡発掘調査報告は、当調査研究センター刊行『京都府遺跡調査報告集』(第1次:第146冊・2011、第2次:第150冊・2012)に所収している。
 - 注8 井上満郎「古代南山城と渡来人」(『京都府埋蔵文化財論集』第6集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- ※挿図作成にあたっては、当調査研究センター武本典子調査員の協力を得た。記して謝意を表したい。

丹波地域における瓦器椀の地域性

山本 梓・引原 茂治

1. はじめに

亀岡市曾我部町で平成30年度から令和元年度にかけて、犬飼遺跡第2次と金生寺遺跡第5次の発掘調査を実施した。犬飼遺跡では、中世の居館跡を検出した。居館は幅約8m・深さ約1.5mを測る大規模な堀で囲まれており、防御機能を持った居館と考えられる。堀からは、土師器皿や瓦器椀などが出土した。金生寺遺跡でも、方形に区画されたと考えられる中世の居館跡を検出し、瓦器椀や土師器皿などが出土した。特に、豎板横棧組の井戸からは、良好な残存状況の瓦器椀などが出土した。これらの瓦器椀は、口径に比して高台径が大きい、口縁部が肥厚する、口縁端部内面に沈線を持たないなどの、いわゆる丹波の瓦器椀の特徴を持つ。

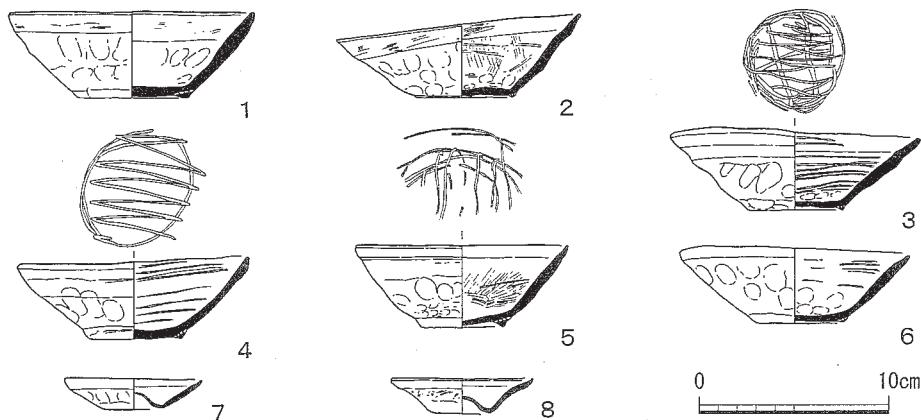
両遺跡において出土した瓦器椀は、金生寺遺跡出土資料が12世紀頃、犬飼遺跡出土資料が13世紀末～14世紀前半頃の様相を持つ。金生寺遺跡から出土した瓦器椀は、例外的に口縁端部内面に沈線を持ち、樟葉産の瓦器椀に類似している。ただ、口径に比して高台径が大きく、樟葉産の瓦器椀の影響を受けた丹波産の製品とみられるが、検討を要する。内外面共に密なミガキが施される。丹波の瓦器であれば、古い様相を示すものとみられる。犬飼遺跡から出土した瓦器椀は、器形が小型化しており、新しい様相を示す。ミガキも内面に粗く施されるのみである。特徴的な点は、内面の底部際を強く指オサエしており、底部から口縁部が明瞭に屈曲する独特の形態を示すことである。

丹波地域の瓦器については、橋本久和氏の「丹波型」瓦器椀の設定以来、認識はされているものの、研究事例は少ない。福知山市大内城跡の報告書^(注1)や『京都考古』第37号^(注2)で伊野近富氏などが触れているのみである。今回良好な資料が相次いで出土したことを受け、これまで丹波で出土した瓦器を再検討し、両遺跡出土の瓦器椀の位置付けを考えることを目的として、共同研究を実施した。小文では、比較的、整理作業の進んでいる犬飼遺跡の資料紹介を兼ねて行うこととした。

2. 犬飼遺跡出土の瓦器椀

今回紹介するのは、犬飼遺跡の居館跡を囲む堀から出土した資料の一部である。この堀からは、瓦器椀や土師器皿のほか、中国製白磁・青磁なども出土している。

1は瓦器椀で、底部際を強く指オサエする。ミガキは内面のみで粗い。形骸化した断面三角形状の高台を付す。口縁部は、ほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる。口径13.0cm・器高4.5cm・高



第1図 犬飼遺跡出土土器実測図

台径5.9cmを測る。2は1と同様の調整・形状の瓦器椀である。口径13.0cm・器高4.4cm・高台径5.2cmを測る。3は1と同様の調整・形状の瓦器椀である。口径13.0cm・器高4.4cm・高台径4.8cmを測る。4は瓦器椀で、内面に粗いミガキを施す。形骸化した断面三角形状の高台を付す。口縁部は、ほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる。内面は、底部から口縁部が丸みを持って立ち上がる。外形は1とほぼ同様である。口径12.1cm・器高4.8cm・高台径4.1cmを測る。5は4とほぼ同様の調整・形状の瓦器椀である。口径11.1cm・器高4.3cm・高台径4.4cmを測る。6は4とほぼ同様の調整・形状の瓦器椀である。口径12.0cm・器高4.0cm・高台径4.6cmを測る。7は土師器皿で、底部が上方に突出する、いわゆる「へそ皿」である。口径7.2cm・器高1.7cmを測る。8は7と同様の土師器皿で、口径7.5cm・器高1.8cmを測る。これらの土師器皿は、平尾政幸氏^(注3)の編年によれば、8A期、1350～1380年頃のものとみられる。

3. 各地域の瓦器椀の様相

共同研究では、亀岡市と福知山市の旧丹波国内の資料を検討した。また、北摂ではあるが、亀岡市に隣接する大阪府能勢町の資料も検討の対象とした。

①亀岡市天川遺跡の瓦器椀

天川遺跡は、稗田野町に位置する、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。農道新設工事に伴って、多くの中世遺物が出土している。^(注4)

出土した瓦器椀は、内面にやや粗いミガキを施しており、外面にはミガキが認められない。見込みの暗文はジグザグである。口縁端部内面に沈線を持たず、口縁部が肥厚する、「丹波型」の瓦器の特徴を有する。口径に対して高台径が大きいことも特徴である。主に土坑SK01と溝SD02の資料を計測したが、SK01出土資料のほうがSD02出土資料より口径・器高共にやや大きい。時期的には、それぞれ13世紀のものとみられるが、SK01出土資料のほうが、SD02出土資料よりやや古相を示すものとみられる。金生寺遺跡出土資料と犬飼遺跡出土資料の間に時期に位置付けられる資料と言える。

②福知山市大内城跡の瓦器椀

大内城跡は市南部の六人部地区に位置する。平地からの比高約30mの丘陵上に設けられた、12世紀後半頃の城館跡である。^(注5)当時の六人部荘を領有していた平頼盛に関係する施設とも考えられている。中国製の輸入陶磁器などが多数出土している。

瓦器椀は、井戸や土坑・溝などから出土している。内外面とも密なミガキを施すものがほとんどである。口縁端部内面に沈線を持たない。口縁部が肥厚するなどの、「丹波型」の瓦器の特徴を有する。口径・器高ともに大振りである。時期的には12世紀中葉から13世紀初頭頃に位置付けられる。なお、金生寺遺跡の井戸出土資料と比較すると、ミガキの状況はほとんど変わらないが、大内城跡出土資料が口縁端部内面に沈線を持たないのでに対して、金生寺遺跡出土資料には沈線があり、「丹波型」瓦器椀の原型とされる樟葉型瓦器椀に近い。ゆえに、金生寺遺跡出土資料のほうが古相を示しているものとみられる。

以上のはか、S B131出土の瓦器椀が注目される。小振りの瓦器椀で、内面底部際を強く指オサエする。犬飼遺跡出土資料に類似した技法がみられる。犬飼遺跡出土資料よりも立ち上がりが急である点が相違するが、大きさや、ミガキが内面に疎らに施されるなど、共通する部分が多い。大内城跡の調査を担当した伊野近富氏は、これを14世紀前半に位置付けている。なお、伊野は、奥谷遺跡採集品の瓦器椀を、これ後の段階に位置付けて14世紀後半の衰退期とする。破片資料とみられ、底部は残存していないが、口縁部が大きく肥厚する点や立ち上がり角度、口径などが犬飼遺跡出土資料に類似する。犬飼遺跡出土資料を14世紀後半頃のものとするには、さらに検討が必要である。しかし、いわゆる「へそ皿」と称される底部が突出した土師器皿も堀から出土しており。非常に示唆的である。

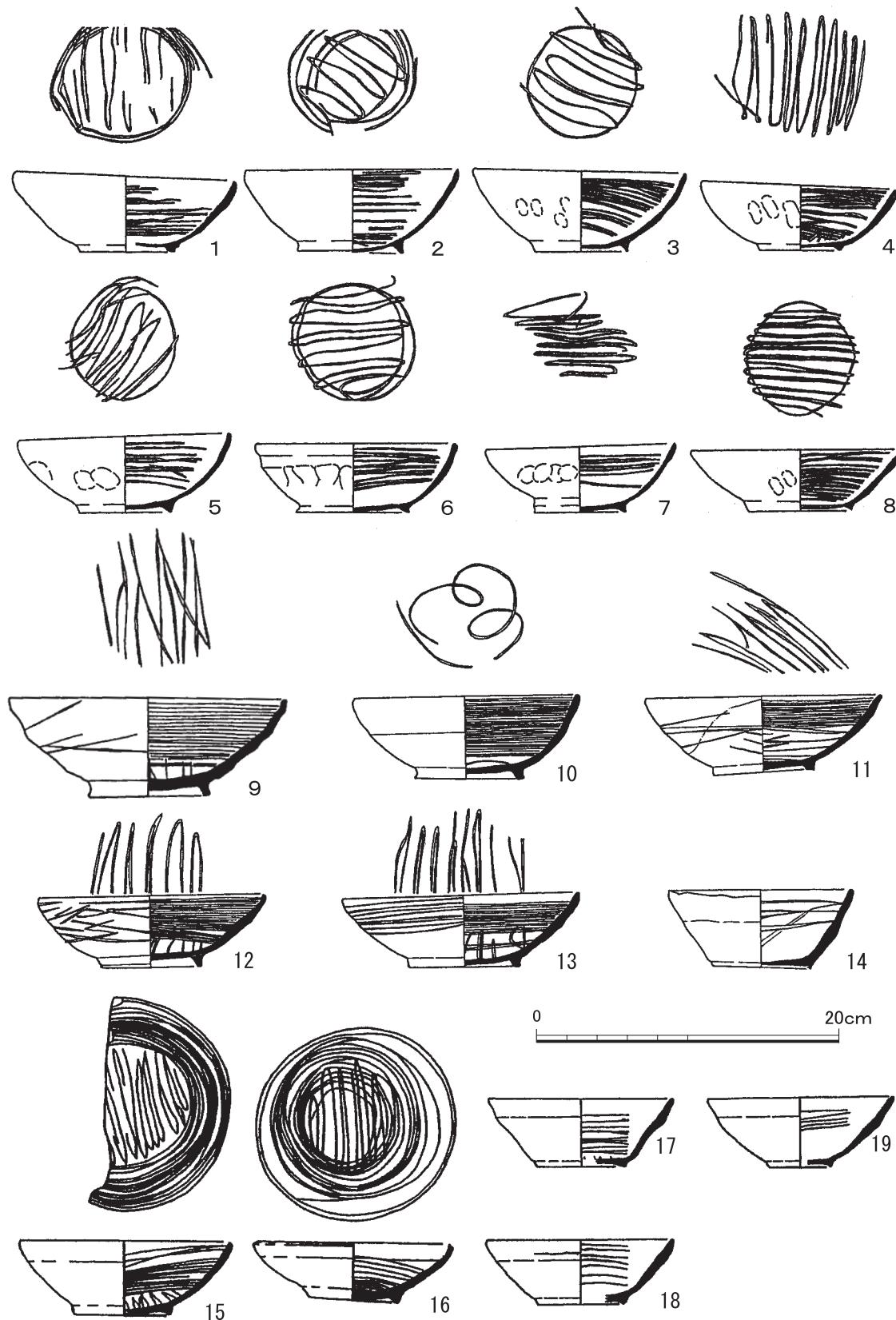
③能勢町の瓦器椀

能勢町では、大里遺跡、野間遺跡の資料を実見した。いずれの遺跡の資料も、いわゆる「丹波型」瓦器椀の特徴を持つ。^(注6)

大里遺跡出土瓦器椀は、口径が13.5cm前後であり、ほぼ13世紀の瓦器椀と同様の大きさである。内面にはやや粗いミガキが施される。外面にミガキは認められない。見込みにはジグザグ状の暗文を施す。天川遺跡出土の瓦器椀とほぼ同様の形態である。13世紀のものとみられる。

野間遺跡出土瓦器椀は、大里遺跡出土瓦器椀に比べて口径・器高ともに小型化する。ミガキは内面のみに疎らに施される。最も注目される特徴は、内面の底部際を強く指オサエしており、底部から口縁部が明瞭に屈曲する独特の形態を示すことである。すなわち、犬飼遺跡出土瓦器と形態が共通している。時期的には14世紀前半頃の瓦器の終末期とされている。

大里遺跡・野間遺跡が所在するのは、旧摂津国の北部である。厳密には丹波地域ではないが、この北摂地域は、東側および北側で丹波国と接する地域であり、瓦器椀的に見れば、「丹波型」瓦器椀流通圏内に含まれるものであることを実感した。



1~3: 天川遺跡SK01 4: 天川遺跡SE03 5~8: 天川遺跡SD02 9~13: 大内城跡SE43
14: 大内城跡SB131 15~16: 大里遺跡中世大溝 17~19: 野間遺跡ピット1

第2図 各遺跡出土瓦器実測図（注1・4・5文献から転載）

4.まとめ

今回、亀岡市犬飼遺跡・金生寺遺跡で出土した「丹波型」瓦器椀について、他の遺跡、他地域から出土した資料と比較検討を行った。その結果、まず、金生寺遺跡の井戸から出土した瓦器椀は、「丹波型」瓦器椀でも最初期に位置付けられるのではないかという可能性が考えられる。これについては、整理作業の進展を待って、さらに検討したい。犬飼遺跡の堀から出土した瓦器椀は、「丹波型」瓦器椀の最終形態を示すものである可能性が考えられる。今回対象とした遺跡以外でも瓦器の出土例は多く、それらも含めて今後も検討する必要がある。それにより、犬飼・金生寺遺跡出土の瓦器椀の位置付けも、より確実なものとなると思う。最近では、丹波国の北側に隣接する丹後国加佐郡、今の舞鶴市の満願寺跡の調査でも良好な瓦器が出土しており、それも含めて、いわゆる丹波を中心とする地域の瓦器の様相が解明できるように、検討を重ねることが重要であると考える。

犬飼遺跡出土瓦器椀については、平尾氏の土師器皿編年によれば14世紀第3四半期のものということになるが、福知山市域や北摂能勢地域の例も考慮すれば、おおよそ14世紀中葉を前後する頃の所産であると考えられる。14世紀は、いわゆる南北朝時代とも称され、朝廷が北朝、南朝の2朝に分かれ、騒乱を繰り返した時代もある。このような時期に、京都の西側に近接する丹波亀山(亀岡)が、その動乱に決して無関係ではなかったであろうことは、容易に想像できる。しかし、その時期の文献資料は少なく、犬飼遺跡が所在する曾我部地域では皆無ともいえる状況である。今回検出した大規模な堀で防御された居館跡は、まさにその時期の当地域の緊張状態を物語る遺跡と言える。このような遺跡の時期を知るための資料として、瓦器椀の活用ができるようになれば、文献資料の少ない地域の歴史を解明するための手がかりとして、有益であると考える。犬飼遺跡・金生寺遺跡ともに整理作業の進捗中であり、より良い報告書を作成するため、各方面からご教示いただけることを、期待したい。

(やまもと・あづさ = 当調査研究センター調査課第1係調査員)

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター調査課第1係副主査)

注1 伊野近富「大内城跡」(『京都府遺跡調査報告書』第3冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注2 伊野近富・石井清司・引原茂治「亀岡盆地出土の瓦器について」(『京都考古』第37号 京都考古刊行会) 1985

注3 平尾政幸「土師器再考」(『洛史』研究紀要第12号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2019

注4 中澤 勝「天川遺跡発掘調査報告書」(『亀岡市文化財調査報告書』第29集 亀岡市教育委員会) 1993

注5 注1と同じ

注6 重金 誠『能勢町文化財調査報告書』第16冊・第24冊 能勢町教育委員会 2000・2006

参考文献

橋本久和『概論 瓦器椀研究と中世社会』真陽社 2018

付表1 瓦器碗観察表

遺跡名	遺構	口径	器高	高台径	器高／口径	高台径／口径	遺跡名	遺構	口径	器高	高台径	器高／口径	高台径／口径
天川遺跡	SD02	12.7	4.0	5.7	0.31	0.45	大内城跡	SK19	14.5	4.3	6.9	0.30	0.48
	SD02	13.0	4.3	6.3	0.33	0.48		SB44	15.0	4.8	6.3	0.32	0.42
	SD02	13.1	4.8	5.9	0.37	0.45		SD06	15.0	4.7	5.9	0.31	0.39
	SD02	13.8	5.2	5.9	0.38	0.43		SB22	14.5	5.2	6.3	0.36	0.43
	SD02	14.0	5.4	5.9	0.39	0.42		SB22	15.8	5.4	7.1	0.34	0.45
	SD02	13.8	4.2	6.7	0.30	0.49		SE43	14.8	4.8	6.9	0.32	0.47
	SE03	13.2	4.7	6.3	0.36	0.48		SE43	15.2	5.4	6.5	0.36	0.43
	SK01	13.4	4.6	6.2	0.34	0.46		SE43	14.3	5.3	6.5	0.37	0.45
	SK01	14.3	5.2	6.9	0.36	0.48		SE43	14.7	5.3	6.9	0.36	0.47
	SK01	13.4	5.1	6.6	0.38	0.49		SE43	14.4	5.7	6.7	0.40	0.47
	SK01	13.2	4.9	6.3	0.37	0.48		SE43	14.4	5.3	7.4	0.37	0.52
	SK01	13.3	5.0	6.7	0.38	0.50		SE43	14.9	5.7	7.1	0.38	0.48
	SK01	13.7	5.0	6.9	0.36	0.50		SE43	15.0	5.2	7.2	0.35	0.48
	SK01	13.9	4.9	7.0	0.35	0.50		SE43	14.2	5.4	6.8	0.38	0.48
	SK01	14.1	5.4	6.8	0.38	0.48		SK158	14.8	5.4	7.3	0.36	0.49
	SK01	14.0	5.8	6.0	0.41	0.43		SK240	15.0	5.7	7.0	0.38	0.47
	SK01	13.9	5.3	6.0	0.38	0.43		SK240	14.8	5.1	6.8	0.34	0.46
	SK01	13.8	5.2	6.3	0.38	0.46		SX248	15.3	5.2	7.7	0.34	0.50
	SK01	13.1	4.7	6.5	0.36	0.50		SX248	14.9	4.9	6.6	0.33	0.44
	SK01	13.8	5.4	7.0	0.39	0.51		SX248	15.2	4.9	6.0	0.32	0.39
	SK01	14.0	5.0	6.1	0.36	0.44		SX248	14.8	5.6	6.9	0.38	0.47
	SK01	13.8	5.4	6.8	0.39	0.49		SX248	15.3	5.0	5.5	0.33	0.36
	SK01	12.7	5.0	6.0	0.39	0.47		SB131	11.8	5.3	5.8	0.45	0.49
	SK01	13.4	4.9	6.1	0.37	0.46	大里遺跡	大溝	12.8	5.0	5.7	0.39	0.45
	SK01	13.3	5.5	6.0	0.41	0.45		大溝	13.5	4.9	6.3	0.36	0.47
	SK01	13.9	5.3	6.4	0.38	0.46		大溝	13.5	4.0	5.9	0.30	0.44
	SK01	13.1	5.0	6.2	0.38	0.47		包含層	13.9	4.3	6.8	0.31	0.49
野間遺跡	SK01	13.8	5.2	6.0	0.38	0.43	野間遺跡	包含層	11.5	3.6	4.0	0.31	0.35
	SK01	13.5	4.7	6.4	0.35	0.47		ピット1	12.0	4.4	5.0	0.37	0.42
	SK01	13.2	4.7	5.7	0.36	0.43		ピット1	12.2	3.5	4.9	0.29	0.40
	SK01	13.5	4.9	6.6	0.36	0.49		ピット1	11.4	5.3	4.5	0.46	0.39
	SK01	13.7	5.7	6.3	0.42	0.46							
	SK01	13.7	5.1	6.8	0.37	0.50							
	SK01	13.7	5.9	5.9	0.43	0.43							
	SK01	14.0	5.1	6.4	0.36	0.46							

擬凹線文土器様式の解体 —浅後谷南式の再検討—

桐井理揮

1. はじめに

弥生時代後期の近畿北部地域では、擬凹線文土器に特徴づけられた土器様式が展開する。石井清司や肥後弘幸らが先鞭をつけた弥生時代後期の土器編年は、高野陽子による一連の研究成果により、三坂神社式→大山式→西谷式→浅後谷南式という変遷觀が示された。^(注1)

しかしながら、墳墓出土の豊富な一括資料に裏付けられた西谷式までの変遷觀に比べて、浅後谷南式は基準資料に溝資料も含まれる上、外来系土器の流入が著しく、小様式ごとの土器相の把握が困難である。本論では、基準資料である浅後谷南遺跡出土資料を再検討し、弥生時代後期を特徴づける在来系統の擬凹線文土器群の変遷に着目することで、その型式変化及び型式の共存関係から当該期の土器様相を再検討してみたい。^(注2)

2. 外来系統土器からみた浅後谷南遺跡出土土器

浅後谷南遺跡は京丹後市網野町に位置する集落遺跡である。平成9～11年にかけて発掘調査が実施され、古墳時代前期の導水施設をはじめ、多くの遺物が出土した。^(注4)この調査で出土した古式土師器は丹後半島の弥生時代終末期の基準資料とされ、「浅後谷南式」が設定された。当初、2分されたが、その後、高野自身によって1～3式に区分された。その内容は以下の通りである。

浅後谷南1式 畿内系小形祭式土器の出現をメルクマールとする。外来系土器は北陸系土器が主体をなす。(土器溜りN)

浅後谷南2式 畿内系土器が主要組成をなす小様式。在地系土器はほぼ擬凹線文が失われる。
(SD2016(古))

浅後谷南3式 畿内系土器に加えて山陰系土器が優勢となり主要型式を占める段階。北陸系土器は客観的な存在となる。(SK2003)

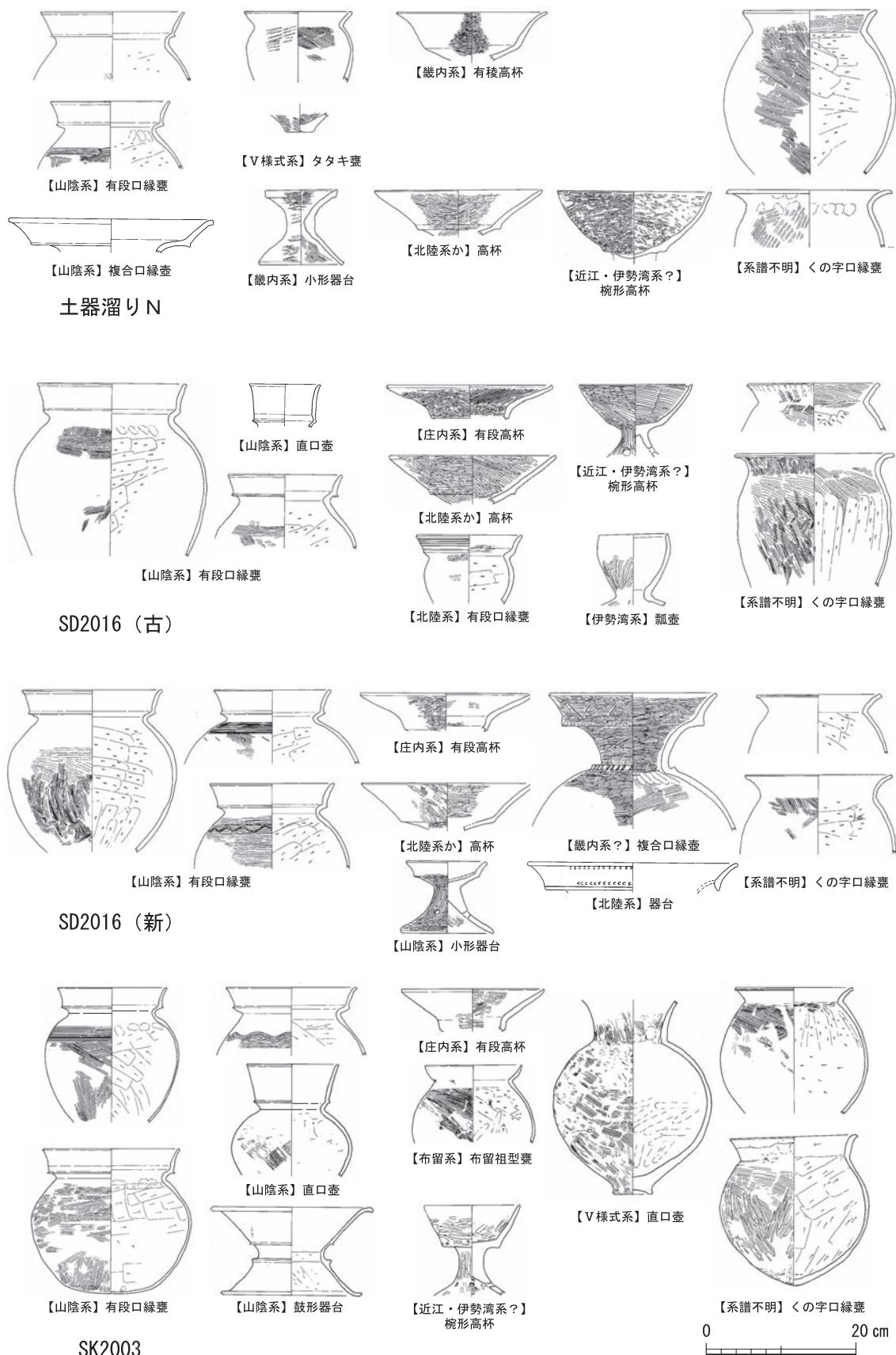
このように、浅後谷南式は設定当初から外来系土器の流入をメルクマールとする様式であり、当該期の小様式も同様に定義されてきた。なお、報告によるとSD2016下層の堆積が「SD2016(古)」であり、その埋没後に再掘削されたのが「SD2016(新)」、さらにSD2016(新)を切ってSK2003が掘削されたとされている。そこで、まずは基準資料のなかでも外来系統の土器を中心に、故地の編年觀を参照しつつ概観しておこう。

北陸系土器^(注6) 北陸系土器は西谷式段階すでに流入が認められ、在来系統の土器にも口縁部伸長などの点で影響を与えており、破片では区別することが難しいものも多い。特に、有稜高杯は当初北陸系土器との関係の中で成立した可能性が考えられるが、丹後半島で変容した形も多く、区別が明確ではない。浅後谷南遺跡では丹後半島の他の遺跡ほど北陸系土器が優勢にならずやや様相を異にする。鉢状の杯部を持つ高杯は、少量ながら各遺構で出土しているが、西谷式には系譜を求めることができない。堀編年で高杯Fとされたものに類似しており、近江・東海地域に祖型を求めている。当遺跡で認められるものは直接伊勢湾沿岸に系譜を求めるというよりも、北陸や近江などで変容したものが中心とみられる。

畿内系土器^(注7) 畿内系土器は、少量ながらすべての遺構で出土しており、器種は甕および高杯と二重口縁壺がある。甕は土器溜りNから突出底のタタキ甕、SK2003から布留形甕が出土しており、土器溜りNとSK2003の先後関係は首肯される。タタキ甕の明確な帰属時期は明らかではないが、布留形甕は口縁部の肥厚が顕著ではなく、肩部のヨコハケも目立たないことから典型的な布留形甕ではなく、むしろ布留形甕搖籃期の祖型甕に近いものととらえたほうが良いのかもしれない。畿内では布留式までにはほぼ消滅する突出底をもつV様式系の直口壺が出土していることからも、SK2003が庄内式新段階との接点を想定できる。なお、後述するように、「く」の字状口縁甕の中にタタキを持つものがあるが、畿内系と断定できるものは少ない。SD2016(古)・(新)、SK2003では庄内系の有段高杯がそれぞれ破片ながら1点ずつ出土しているが、それぞれに顕著な型式差を見出すことが難しく、庄内式中～新段階の範疇でとらえておく。したがって、畿内系土器は土器溜りNに若干古い要素は認められるものの、SD2016、SK2003は庄内式新段階を中心で、下限は布留式最古段階と考えられる。

山陰系土器^(注8) 山陰系土器は土器溜りNでは甕など限定的な器種にみられるのみだが、SD2016では直口壺が出現し、SK2003ではさらに鼓形器台が認められるなど、徐々に比率、器種ともに増加傾向が認められる。有段口縁甕は各遺構で一定量出土しているが、草田6段階と大木式を分別する指標とされる底部丸底化の度合いがわかるものがほとんどない。しいていうと、土器溜りNは口縁端部を丸く収めるものが多いのに対し、ほかの遺構では端部に面を持つもの、あるいは外肥させるものが目立つなど、やや新しい要素を持つ程度で、SD2016とSK2003の間では顕著な時期差は見出しがたい。また、直口壺はいずれも口縁部の伸長が顕著ではなく、草田6段階にのみ認められる型式とされる。鼓形器台はSK2003で2点出土している。鼓形器台は草田6段階から小谷2期にかけて著しく器高が縮小するとされるが、浅後谷南遺跡出土のものはすべて器高が高く、やはり草田6段階に比定される。小形器台は、プロポーションは山陰で出土するものと類似するが、円盤充填を伴わないなど製作技術は異なっているようだ。したがって、土器溜りNが草田5段階にさかのぼる可能性がある以外は、草田6段階でも古相を中心とすると考えられる。

その他 これら以外に、わずかながら伊勢湾沿岸に系譜を持つ土器と、系譜不明の土器がある。「く」の字状口縁甕(以下、「く」の字甕)は、各遺構から一定量出土しており、内面に明瞭な稜を持つものと、内面の稜が不明瞭で外反口縁を持つものに大別される。外面にタタキ目を残すものも



第1図 浅後谷南遺跡出土の外来系統土器

一定数認められるが、口頸部が締まらないプロポーションから、畿内系と判断することは難しい。後者は周辺では若狭湾沿岸から上越地域まで日本海側に広く類例を認め、丹後半島よりも東の日本海地域との関係を重視すべきであろう。これらのくの字甕について別論したい。

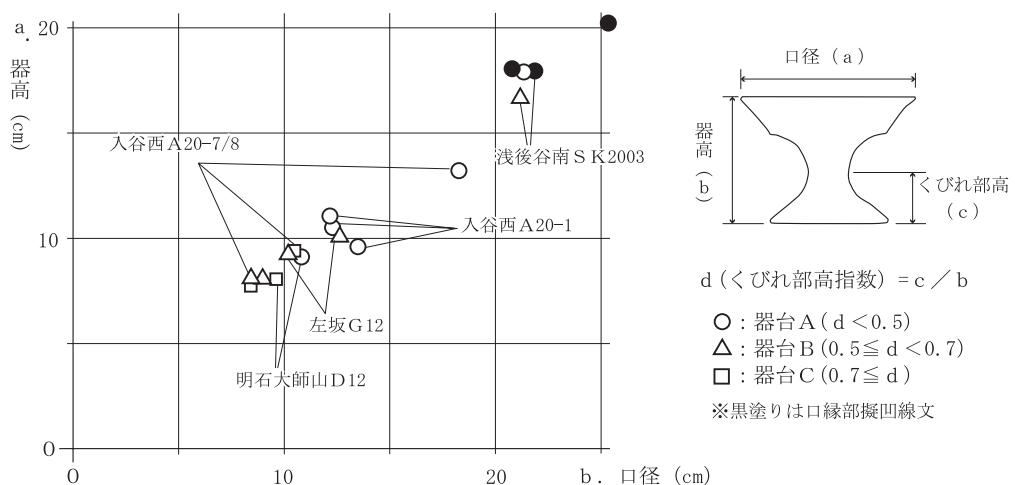
以上、浅後谷南遺跡出土の外来系統土器を概観した。外来系統土器を論じる際には「搬入品」、「忠実模倣品」、「変容品」の差異を見極める必要があるが、混和剤の肉眼観察では在来系統土器群と判別不能なものも多く、必ずしも搬入土器ではなく丹後半島で受容された忠実模倣品や変容品が主体を占めると考える。その点では故地の編年と対照する際にはやや慎重である必要があるうが、遺構間で構成比の差異は認めうるもの顕著な型式差を見出せないことから、特にSD 2016(古)・(新)およびSK 2003で大幅な時間差を想定する必要はない。外来系統土器の流入度合いは編年の指標としてはやや不安定な要素であることは否めず、あるいは、時期による差異ではなく遺構の性格を反映したものと捉えることもできるのである。

この問題を再検討するため、次節では、丹後半島の他の遺跡出土資料を援用し、在来系統土器の変化の方向を示したい。

3. 在来系統土器群の変質

(1) 器台の型式変化と時間軸の設定

在来系統の器台の型式変化と組成に着目して、時間軸を整理する。在来系統器台は、当該期において最も顕著な変化をみせ、型式変化が捉えやすいだけでなく、出土量も多く、時間軸を認識しやすい器種である。高野は器台の変化を係数化し、弥生時代後期の土器の編年を行っており、当地域の時間軸の指標としては有効であると考える。そして、畿内系小形器台の出現を浅後谷南式開始のメルクマールに設定し、その直前段階の白米山北1号墳礫敷遺構が西谷3式、畿内系小形器台が含まれる浅後谷南遺跡土器溜りNが浅後谷南1式と設定した。西谷式以来認められる器台は胴部中位に強いくびれを持ち、口縁部はやや外反しながら拡張し、口縁部外面には擬凹線文を施すものである。このような特徴をもつ器台を在来系統の器台と定義し、その法量を検討して



第2図 在来系統器台の器形と法量

いこう。第2図は横軸に口径、縦軸に器高をとり、さらにプロポーションを規定する、くびれ部の高さを考慮してプロットしたものである。ここでは仮に、「くびれ部高指数」が0.5未満のものを器台A、0.5以上0.7未満のものを器台B、0.7以上のものを器台Cとしておく。

法量からみると、器高、口径とも15cm前後を境に大形、小形の法量分化が認められることがわかる。畿内系小形器台と共に伴する資料はすべてが大形品であり、在来系統器台に小形化傾向は認められない。高野が指摘するように畿内系小形祭式土器の出現を契機に、在来系統の器台のなかに小形化するものが出現すると考えられる。

さらに、その組み合わせに注目すると、浅後谷南遺跡SK2003や入谷西A20号墳のように大形品と小形品が共存するセットと、左坂G12・13号墳のように小形品のみで構成される一群が認められることに気が付く。両者は法量以外の要素でみても、前者が器台Aを含むのに対し、後者は器台Bを中心となるという違いがある。くびれ部が器高の高い位置にある小形器台B・Cは、丹後半島における古墳時代の小形器台の主流をなすものであり、器台Aに後出して器台B・Cが出現することは明らかである。明石大師山D12号墳では弥生時代以来の胴部中位にくびれを持つ器台Aは消失し、くびれ部が胴部の高い位置にあり、内外面に緻密なミガキを施した器台Cのみで構成されることから、今回提示した資料のなかでは最も後出すると考えられる。

したがって、在来系統器台の変遷観としては、

第1段階 大形品のみで構成させる段階。くびれ部高指数0.5未満の器台Aが主体。

第2段階 大形品・小形品が併存する段階。くびれ部高指数0.5～0.7の器台Bが主体。

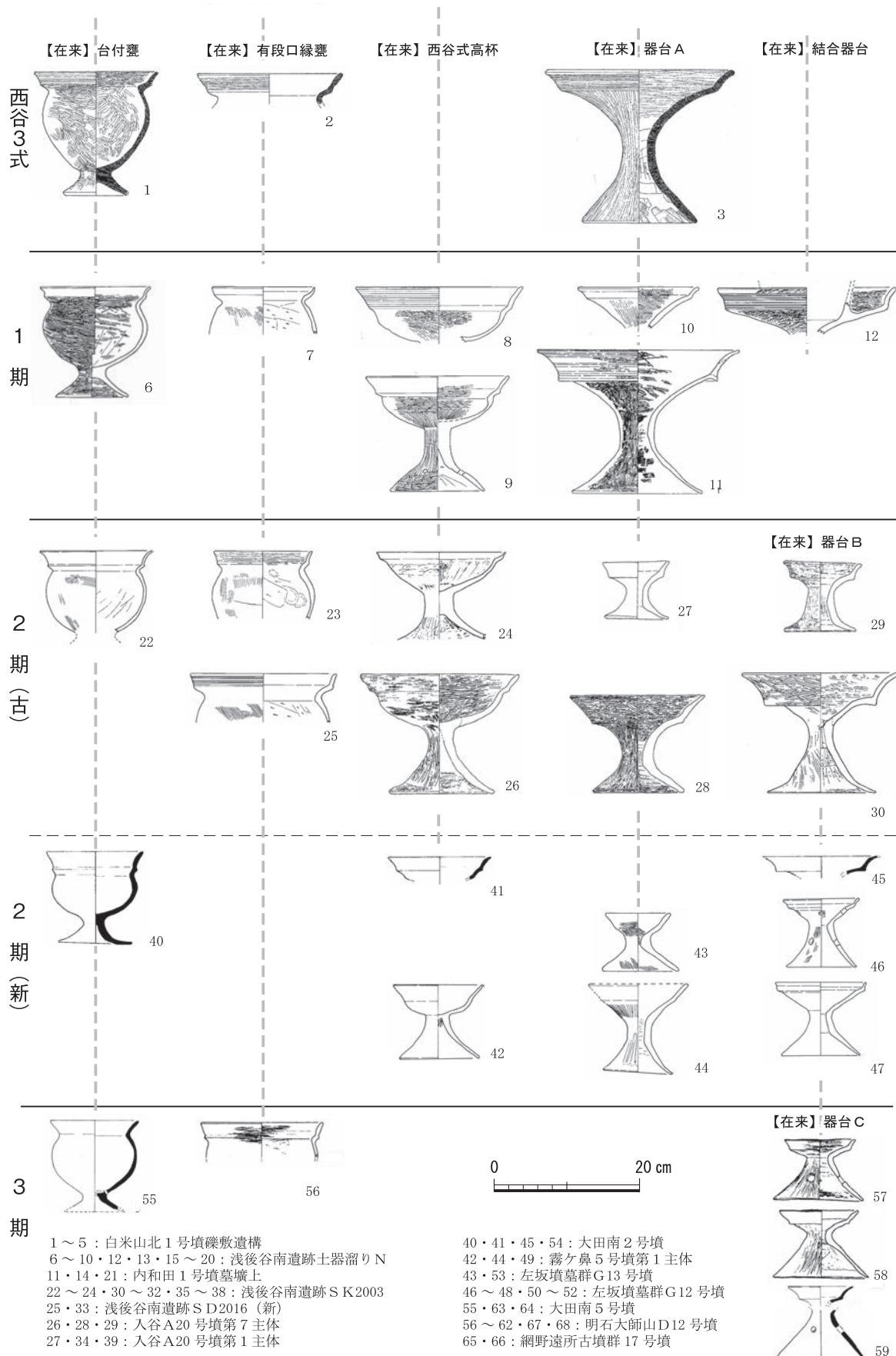
第3段階 小形品のみで構成させる段階。くびれ部高指数0.7以上の器台Cが主体。

という変化を追うことができる。なお、第2段階は器台A・Bが混在するうえ、大形・小形が併存するため、段階としてはやや曖昧さを残すが、小形器台のみから構成される左坂G12・13号墳や霧ヶ鼻5号墳第1主体をより新しい様相ととらえ、浅後谷南遺跡SK2003や入谷西A20号墳は先行する様相ととらえておく。なお、第2段階の中で畿内系の小形器台と入れ替わるように山陰系の鼓形器台が出現するとともに、西谷式を特徴付けた結合器台は消滅し、在来系統器台の口縁部の擬凹線文はほとんど認められなくなる。

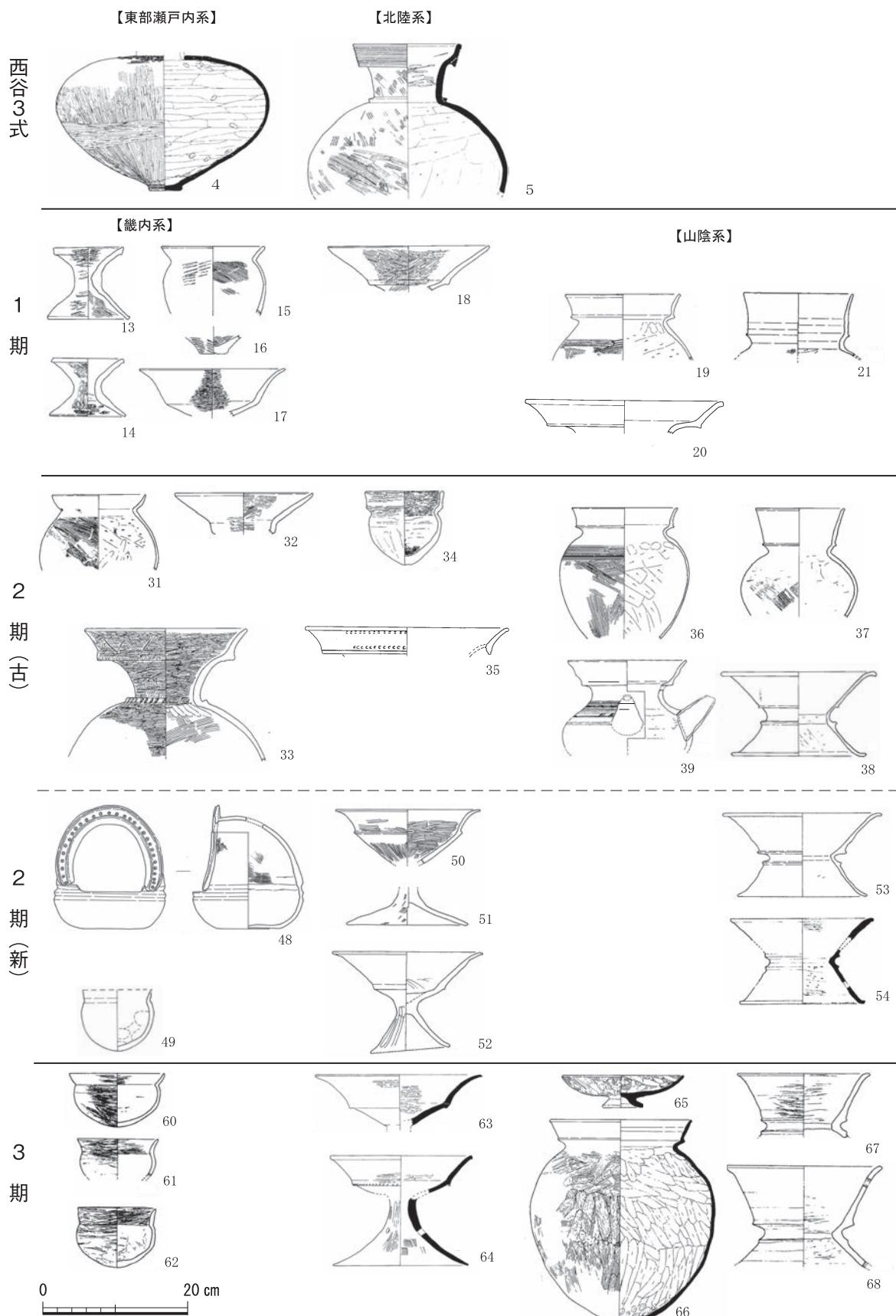
(2) 在来系統土器群の変遷

次に、器台以外の器種の変遷についても概観しておきたい。本来であれば各器種の型式変化を検討し、一括資料に還元する手法をとるべきだが、現状では検討に耐える資料数が得られていないため、器台の型式変化から想定した一括資料群の変遷を第3図に示し、各器種が矛盾なく組列できることを確認するにとどめたい。

甕 在来系統の甕は、拡張した口縁部に3条程度の擬凹線文を施すもので、多くは内面にヘラケズリが認められる。これまでの研究では、次第に擬凹線文を消失することが示されているが、全形をうかがうことができる出土事例が限られており、器形の変化を正確に追うことは難しい。今回提示した資料でも、擬凹線文が消失する変化は追認でき、さらに甕全体に占める在来系統甕の比率も主体ではなくなる。それとともに器形も小形のものが主体を占めるようになり、口縁部



第3図 丹後半島における古式土師器編年案①



第4図 丹後半島における古式土師器編年案②

の立ち上がりも端部をつまみ上げるだけの個体が増加するなど、全体的に技法の形骸化をうかがうことができる。第2段階新相～第3段階の中ではほぼ消滅すると考えられる。

台付甕 台付甕は大山式で出現して以降、一貫して丹後半島では主要な器種であり続ける。当初は内外面とも緻密なミガキを施すが、浅後谷南遺跡SK2003では内面下半がヘラケズリで仕上げられるなど、仕上げの調整を省略したものが増加する。また、甕と同じように器高も縮小傾向を看守しうる。なお、口縁部形状は外来系土器の流入を反映しバリエーションが認められるが、台付甕自体は在来系統土器群がほぼ終息する第3段階まで出土が認められる。

高杯 西谷式高杯は破片数が多いものの全形をうかがうことができるものが少ない。口径と器高の変化を検討すると、先述した器台と同様、大田南2号墳出土の高杯のように全体としての形状はとどめながらも小形化し、第3段階には消失するものと考えられる。また、脚部も裾部がスカート状に広がる形状であったものが次第に短脚化・形骸化し、単純に「ハ」字状に広がる形状となる。

以上のように、在来系統の器種は、いずれも①擬凹線文の消失、②器体の小形化、③調整の簡素化、という同質の変化が想定できることから、器台の型式変化をもとに想定した時間軸には一定の蓋然性があると考えられる。したがって、器台の変化から想定した各段階を「期」と読み替えることは許されよう。なお、第2段階は前項で検討したように大形器台の有無をもって新・古に区分できる可能性があるが、一方では集落出土資料の中に小形器台A・Bのみで構成される資料は得られていない。そのため、現時点では可能性として古相・新相としてとらえておくのが妥当だろう。

(3) 外来系統土器の動向と他地域との併行関係

最後に、外来系統土器の動向を整理し、他地域との併行関係について見通しを述べておきたい。第4図では、第3図の変遷観を元に、共伴する外来系統土器を提示した。

第1表 各地の編年との対応関係

丹後			近畿	山陰	北陸南西部
基準資料	本論	高野2003 /2006	西村2008	松山2015	田嶋1986 /2008
		西谷3式	古段階 庄内式 新段階	草田4	4群
浅後谷南土器溜りN	1期	浅後谷南1式		草田5	5群
浅後谷南SK2003 入谷A20号墳 第1・7主体	2期(古)	浅後谷南2・3式		草田6古相 (大木式)	6群
左坂G12・13号墳 大田南2号墳墓壙上面 霧ヶ鼻5号墳第1主体	2期(新)		古段階 古相 布留式 古段階 新相		7群
明石大師山D12号墳 大田南5号墳墓壙上面	3期	霧ヶ鼻式		草田6新相 (小谷1)	8群

まず、畿内系土器との関係は、布留傾向甕、庄内系有段高杯の存在から、2期古相は庄内式新段階と接点を持つと考えられる。後出する明石大師山D12号墳の小形丸底壺は布留式古段階に比定されることから、2期古を庄内式新段階、3期を布留式古段階と併行するものと考えておく。

山陰系土器との関係は、2～3期に口縁部の短い直口壺が存在することや丸底甕の不在を根拠に、草田6段階と併行すると考える。さらに、浅後谷南遺跡SK2003やSD2016の山陰系土器群は、先述したように草田6段階古相に比定できるほか、入谷西A20号墳第1主体部出土の注口付壺も草田6段階新相には継続しない器種であり、2期古相は草田6段階でも古相の様相を持つ。ただし、志高遺跡SK86126では小谷2段階の器高が縮小した鼓形器台を伴っていることから、その直前段階の3期は草田6段階新相(小谷1式)に併行すると考えられる。1期は山陰系土器自体が僅少であるが、甕の口縁部形状がシャープなものがあり、草田5段階との接点が想定できる。

また、東海・近江系土器は出土量が少ないが、左坂G12号墳で口縁部を「T」字状に拡張する手焙形土器が出土しており、中居編年Ⅲ-1期、布留式古段階との接点を考えておきたい。^(註11)

4. 小結

本論では、丹後半島の古墳出現期の土器群の推移について若干の見通しを述べた。当地域の土器編年は、資料の少なさもあり高野による一連の研究以降、新たな展開はほぼ皆無であった。本論では既存の資料の再検討を中心に、高野の研究を踏まえ再構成を試みたが、提示した資料は器種に大きな偏りがある墳墓出土資料を中心であり、当該期の土器様相の一端を示したに過ぎない。この点に関しては資料の蓄積を待ち、再論されなければならない。なお、本論は令和元年12月14日に当センターで開催した「第21回東日本古墳確立期時研究会」の際に、実際の資料を前に参加者から頂いた助言を参考に構成したものである。末筆ながら感謝を申し上げたい。

(きりい・りき=当調査研究センター調査課調査第1係調査員)

- 注1 石井清司「丹後・丹波地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編I 木耳社) 1989、肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年(上)」(『太禰波考古』第7号 両丹考古学研究会) 1995
- 注2 野島永・高野陽子「近畿地方北部における古墳出現期の墳墓(1)(2)(3)」(『京都府埋蔵文化財情報』第74・76・83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999・2000・2002、高野陽子「北近畿における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相」(『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』(財)大阪府文化財センター) 2003、同「丹後地域」(『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター) 2006、同「タニワの土器をめぐる交流」(『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム7 香芝市二上山博物館) 2007
- 注3 本論でいう「在来系統の土器」は弥生時代後期の三坂神社式・大山式に端を発する擬凹線文土器群に祖型を求めることができる土器群を指すものとする。
- 注4 石崎善久・黒坪一樹・福島孝行「(1)浅後谷南遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第93冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注5 土器溜りN以外はそれぞれの遺構の前後関係は調査時の所見からも裏付けられている一方で、遺構の切り合が著しく、「下層の溝SD2016の混入遺物を除くため、口縁の25%以上残存している個体のみ図示した」ともあり、調査時から遺構の分別にはやや難があったことが分かる。
- 注6 以下、山陰系土器は下記の文献に依る。

松山智弘「山陰」(『前期古墳編年を再考する』Ⅱ—古墳出土土器をめぐって—発表要旨集・資料集
中国四国前方後円墳研究会) 2015

注7 以下、畿内系土器は下記の文献に依る。

西村 歩「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」(『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム8 香芝市二上山博物館) 2008

注8 以下、北陸系土器は下記の文献に依る。

田嶋明人「漆町遺跡出土土器の編年的考察」(『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター) 1986、同「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その1)」(『石川県埋蔵文化財情報』第20号 (財)石川県埋蔵文化財センター) 2008、堀 大介「古墳成立期の土器編年—北陸南西部を中心に—」(『朝日山 急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査』朝日町文化財調査報告書第3集 朝日町教育委員会) 2002

注9 滝沢規朗「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」(『三面川流域の考古学』第4号) 2005

注10 前掲(注2)野島・高野 1999

注11 中居和志「古墳出現前後の近江地域—土器編年を中心に—」(『立命館大学考古学論集V』立命館大学考古学論集刊行会) 2010

図版の出典

白米山北1号墳：河野一隆「(3)白米山北古墳」(『京都府遺跡発掘調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

内和田1号墳：森 正「(1)内和田古墳群」(『京都府遺跡発掘調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

浅後谷南遺跡：前掲(注4)文献

入谷西A20号墳：広瀬和雄・大野壽子編『入谷西A-20号墳発掘調査報告書—A-11・12号墳試掘調査—』奈良女子大学考古学研究報告3 奈良女子大学大学院人間文化研究科文化史論講座 2005

大田南5号墳：横島勝則・岡林峰夫編『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡 第2次～5次発掘調査報告書』(弥栄町教育委員会・峰山町教育委員会) 1998

大田南2号墳：肥後弘幸編『大田南古墳群—大田南2・3号墳、矢田城跡発掘調査—』(『京都府弥栄町発掘調査報告』第7集 弥栄町教育委員会) 1991

霧ヶ鼻5号墳：下川賢司・中島陽太郎編『霧ヶ鼻古墳群発掘調査概要』(『野田川町文化財調査報告書』第6集 野田川町教育委員会) 1990

左坂古墳群G支群12・13号墳：石崎善久「(1)左坂古墳群」(『京都府遺跡発掘調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

明石大師山古墳群D支群12号墳：加藤晴彦編『明石大師山古墳群・明石城跡』(『加悦町文化財調査報告』第32集 加悦町教育委員会) 2004

古墳築造終焉後の環状瓶(下)

名村 威彦

(5) 歌姫西窯跡群^(注17)

奈良県奈良市朱雀に所在する。奈良県北部の奈良山丘陵に位置する須恵器窯跡群の1つである。環状瓶が出土した第11号地点1号窯は、現状保存のため窯体の一部が調査され、半地下天井架構式窯窓が想定されている。

環状瓶は灰原から破片で5点、縦型環状瓶と横型環状瓶が出土した(第4図5-1~5)。5-1は胴部の破片である。口頸部の剥離痕跡から、横型環状瓶とわかる。5-2・5-3も胴部の破片である。いずれも天面は無文で、底面に2条の沈線がめぐる。5-4も胴部の破片である。口縁となる穿孔が確認でき、その周辺は指頭押圧痕がある。注口はとりつけられない。口縁の位置から横型環状瓶である。5-5は縦型環状瓶の脚台部である。

環状瓶の製作時期は、第11号地点1号窯灰原の出土須恵器から飛鳥Ⅲ~Ⅳである。

(6) 菅江遺跡^(注18)

滋賀県米原市菅江に所在する奈良時代前期から後期前半にかけての須恵器窯跡群である。環状瓶は1号窯跡の第1灰原から出土した。1号窯跡は半地下天井架構式無段窯窓である。前庭部と焚口が消失しており、灰原も完全には遺存していなかった。

口頸部とB面が欠損しているが、その他は良好に遺存している縦型環状瓶である(第4図6)。A面側の胴部は無文である。胴部最下位はケズリによって平底状に成形されている。

環状瓶の製作時期は、1号窯跡第1灰原出土の須恵器から平城宮Ⅳと考えられる。

(7) 安居大堤窯跡群^(注19)

富山県南砺市福野に所在する安居窯跡群の支群の一つである。環状瓶は大堤窯跡群2号窯跡灰原から出土した。報告書が未刊行のため詳細は不明であるが、2号窯跡は8世紀代の地下掘り抜き式窯窓である。

少なくとも2個体の縦型環状瓶が出土しており、全形がわかるものが1個体と胴部破片が1点、脚台部が1点である(第4図7-1~3)。7-1は胴部破片である。内側面の剥離痕が明瞭に残っており、外側面に続く曲面がわずかに遺存している。外面は中央に弱い沈線が施されている。7-2は全形が推定できる縦型環状瓶である。A面側の胴部は、中央に弱い沈線がめぐらされている。また、内部に、仕切り板ともいえる厚さ8mm前後の粘土板がはりつけられている。脚台部は非常に短く、ハの字状に広がる。7-3は脚台部である。7-2にみられるような仕切り板が接合されていた痕跡が残っている。

環状瓶の製作時期は奈良時代中頃とされる。^(注20)

(8) 篠場瓦窯跡^(注21)

静岡県浜松市浜北区根堅に所在する。1～3号窯跡が検出されており、1号窯跡は地下掘り抜き式有階無段式窯窯、あるいは半地下天井架構式有階無段式窯窯である。環状瓶は1号窯灰原から出土した。

全形が推定できる縦型環状瓶が1点出土した(第4図8)。A面側の胴部は第1文様帶と第2文様帶があり、どちらも波状文がめぐらされている。B面側の胴部は大部分が欠損しているが、第1文様帶と第2文様帶があることは確認できる。外側面にも2列の波状文が施されている。胴部下端には、焼成前に外から内に向けて小さな穿孔が1か所、施されている。口頸部と胴部、脚台部に自然釉がかかっている。

環状瓶の製作時期は、1号灰原出土の須恵器から遠江V期前葉と考えられる。

(9) 市毛本郷坪遺跡^(注22)

茨城県ひたちなか市市毛本郷坪に所在し、那珂川を南に望む台地上に位置する。数次にわたる調査が実施されており、古墳時代から平安時代までの建物跡、溝、土坑などが検出された。環状瓶は、第6次調査時に浅い溝状遺構が確認された第2号トレンチから出土した。

脚台部の一部が遺存した縦型環状瓶の胴部破片が1点出土した(第4図9)。A面側の胴部第1文様帶が確認できる。第1文様帶は波状文と刺突文が施される。外側面はA面側から、凹線・波状文・凹線・波状文の順に施される。脚台部は基部が僅かに残る程度である。

環状瓶の型式変化からは7世紀末から8世紀初頭のものと考えられる。

(10) 前原遺跡^(注23)

茨城県日立市久慈町に所在する。茨城県北部を南流し太平洋へと注ぐ久慈川の河口部左岸、海食崖の形成による低位段丘上に位置する。昭和40年代の河道付替以前は遺跡南方の眼下に久慈川が流れている。環状瓶は竪穴建物跡の埋土を掘り下げた際に出土した。

環状瓶は胴部の破片が1点出土している(第4図10)。胴部は、ほとんど欠損しており、外側面が一部遺存している。A面側の胴部は第1文様帶がわずかに残っており、波状文が確認できる。波状文の外側には凹線が2条巡っている。外側面はA面寄りに2条の凹線が巡り、無文帶をはさんで中央にも2条の凹線が巡る。B面寄りには1条の凹線が巡っており、中央の凹線との間には波状文が施される。B面側の胴部は遺存状況が悪いが、A面側と同様に波状文と凹線が施される。

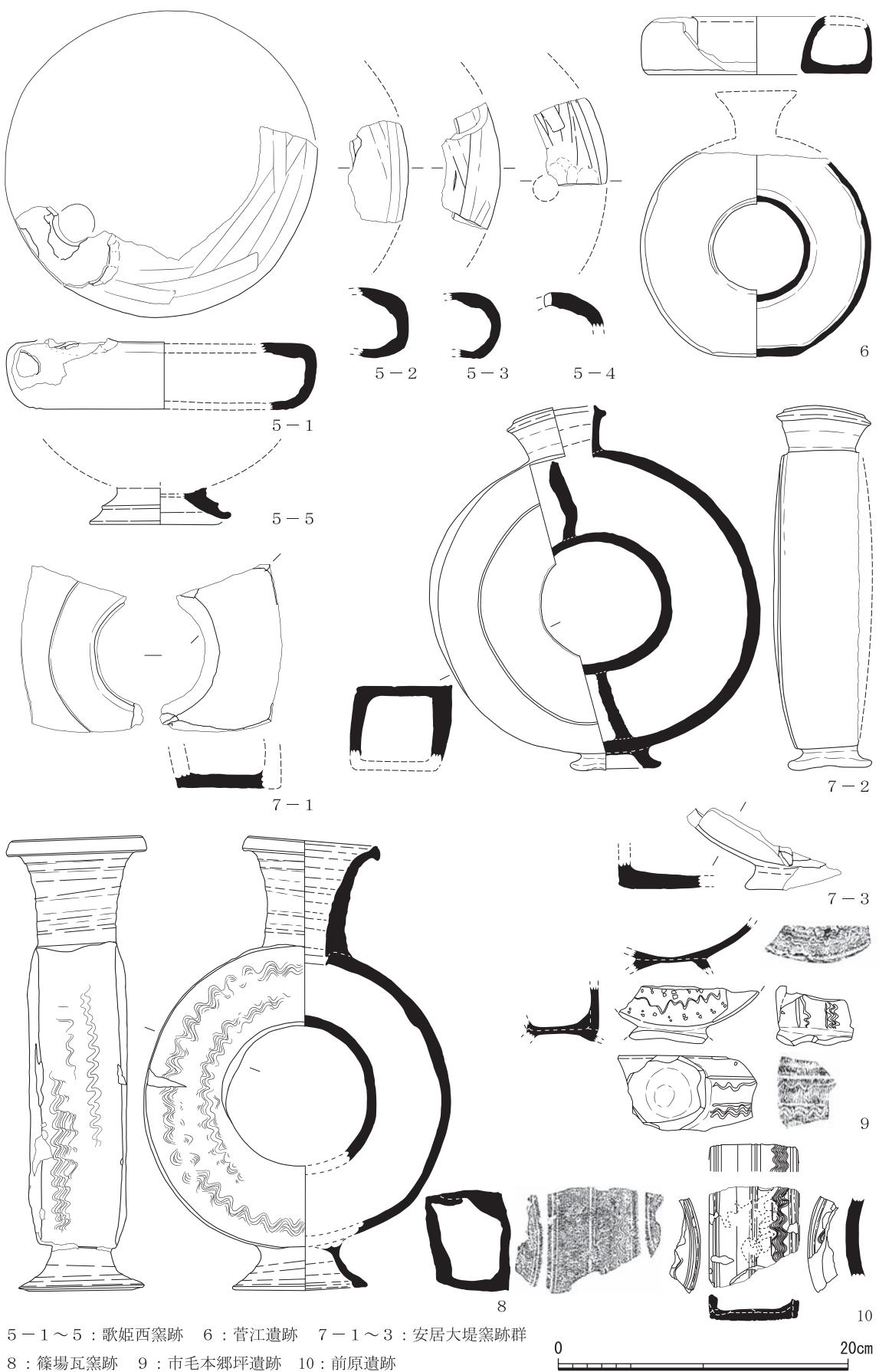
環状瓶の型式変化からは7世紀末から8世紀初頭のものと考えられる。

(11) 平城京左京三条一坊一・二坪^(注24)

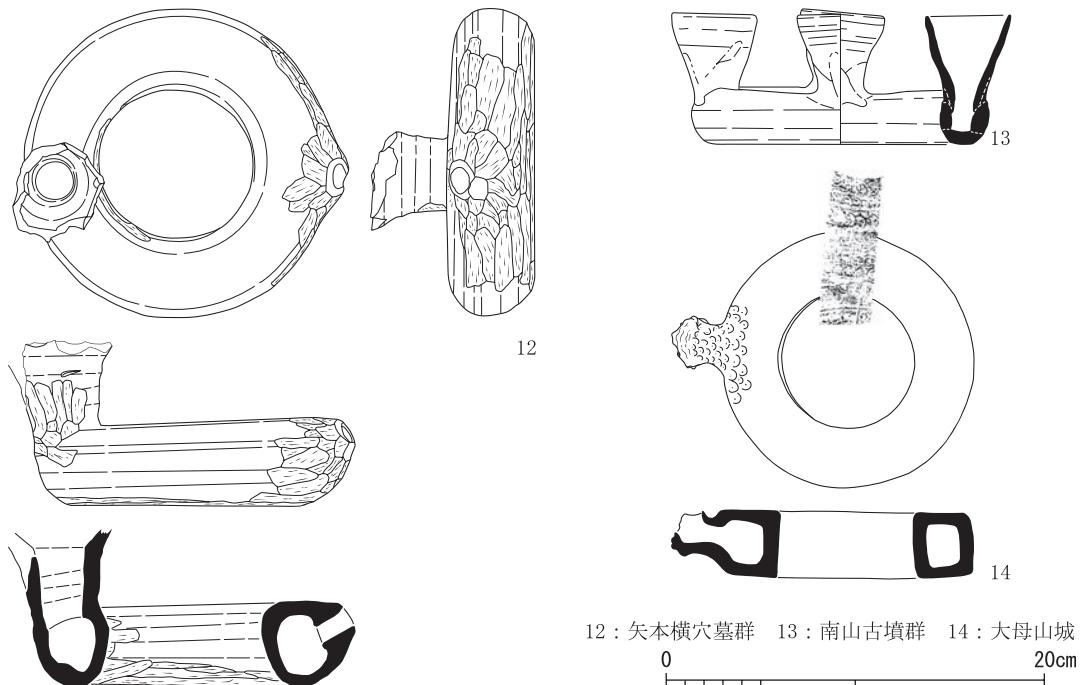
奈良県奈良市三条大路南に所在する。大型の井戸や条間小路、築地塀、掘立柱塀、大規模な鍛冶工房等が検出された。正式な報告書は未刊行であるが、環状瓶が出土したようである。^(注25)

(12) 矢本横穴墓群^(注26)

宮城県東松島市矢本に所在する。宮城県北部を東流し、太平洋に注ぐ鳴瀬川の河口付近、左岸側の丘陵に位置する。横穴墓は南北約1.5kmにわたって約200基以上が分布すると推定されてお



第4図 環状瓶(2)(S=1/4)



第5図 環状瓶関連資料(S=1/4)

り、107基が調査、確認されている。

ほぼ完形の横型環状瓶と考えられる土器が1点、11号墓から出土した(第5図12)。口縁部は打ち欠きにより欠損している。口頸部が接合された側とは反対側の胴部外側面に穿孔が施されている。胴部は無文である。報告書内では憩として製作されたとされており、ここでは環状瓶関連資料として紹介しておく。

共伴した土器は追葬時に片付けられたものと考えられ、7世紀後半から8世紀中頃までのものがある。

3. 縦型環状瓶と横型環状瓶の製作技術と系譜

かつて筆者は、縦型環状瓶と横型環状瓶は製作時期が並行せず、先後関係にあると捉えていた。しかし、両者が並行して製作されたことは既に指摘されているところであった。^(注27)そこで、縦型環状瓶と横型環状瓶の製作技術と系譜について、改めて整理したい。

筆者は環状瓶の製作技術と系譜を検討する際、胴部製作技術に着目し、I～IV類に整理した。^(注28)製作技術の詳細については拙稿で詳述しており、ここでは述べないが、I類とII類は同一の技術系譜の中で、製作技術が簡略化されたものと捉え、III類とIV類はI・II類とは異なる技術系譜として登場したものと考えた(第6図)。

まず、縦型環状瓶は、7世紀末までは基本的にI類によって製作されるが、7世紀末から8世紀初頭頃にII～IV類によって製作されるようになる。その後、8世紀代はIII類による製作のみが確認できる。一方、横型環状瓶は7世紀後半以降のものが確認されており、一貫してIII類で製作されている。このように、縦型環状瓶と横型環状瓶は7世紀後半以降に並行して製作されている

ことが明らかで、主に7世紀代は、縦型環状瓶にⅠ類、横型環状瓶にⅢ類を用いる技術系譜の二者が存在していた。そして、8世紀初頭頃に縦型環状瓶の製作技術として、Ⅱ・Ⅲ類が用いられるようになる。縦型環状瓶にⅢ類の製作技術を採用することとなった背景の詳細は不明であるが、製作者の技術的交流があったのかもしれない。

2つの技術系譜の源流については明らかではないが、Ⅲ類の技術系譜について示唆的な遺物がある。1つは奈良県橿原市南山町の南山古墳群4号墳から出土した四口壺である（第5図13）。4号墳は径18mの円墳で、墳頂部表土から3点の陶質土器が出土した。^(注29) 環状の体部に4つの口縁部が取りつけられたものとされており、体部は中空となっている。韓半島の燈盞と類似するとされるが、形態は横型環状瓶と非常によく似ており、体部の製作技術も環状瓶に用いられるⅢ類と同様である。南山4号墳の出土品は、ほとんどが渡来系遺物であり、その築造時期を明らかにするにはなお検討を要するが、5世紀前半から半ばと考えられている。^(注30) もう1つは韓国京畿道楊州市楊州洞に所在する楊州大母山城から出土した環状土器瓶である（第5図14）。楊州大母山城は朝鮮三国時代から高麗時代を中心とした山城である。環状土器は1983年度調査区の建物跡から出土した。環状の体部に亀の頭を模した口頸部を取り付けたもので、口縁部は下向きに開口している。体部にはコンパス文が全面的に施されており、内部は中空で、断面系は隅丸方形である。体部の製作技術は不明である。共伴した土器から統一新羅時代初頭から中頃とされており、7世紀末から8世紀ごろのものである。

上述した資料のほかにも、（伝）大邱市や九宜洞百濟古墳で出土した朝鮮三国時代の環状土器や燈盞も存在するが、いずれの資料も地理的・時間的な懸隔が大きく、横型環状瓶の直接的な系譜として捉えることはできない。ただ、南山4号墳の陶質土器の製作技術にⅢ類が用いられている点や、大母山城の環状土器の胴部断面形が、同時期の横型環状瓶の胴部断面形に類似する点などは興味深く、横型環状瓶の技術系譜が韓半島に求められる可能性があることを指摘しておきたい。^(注31)

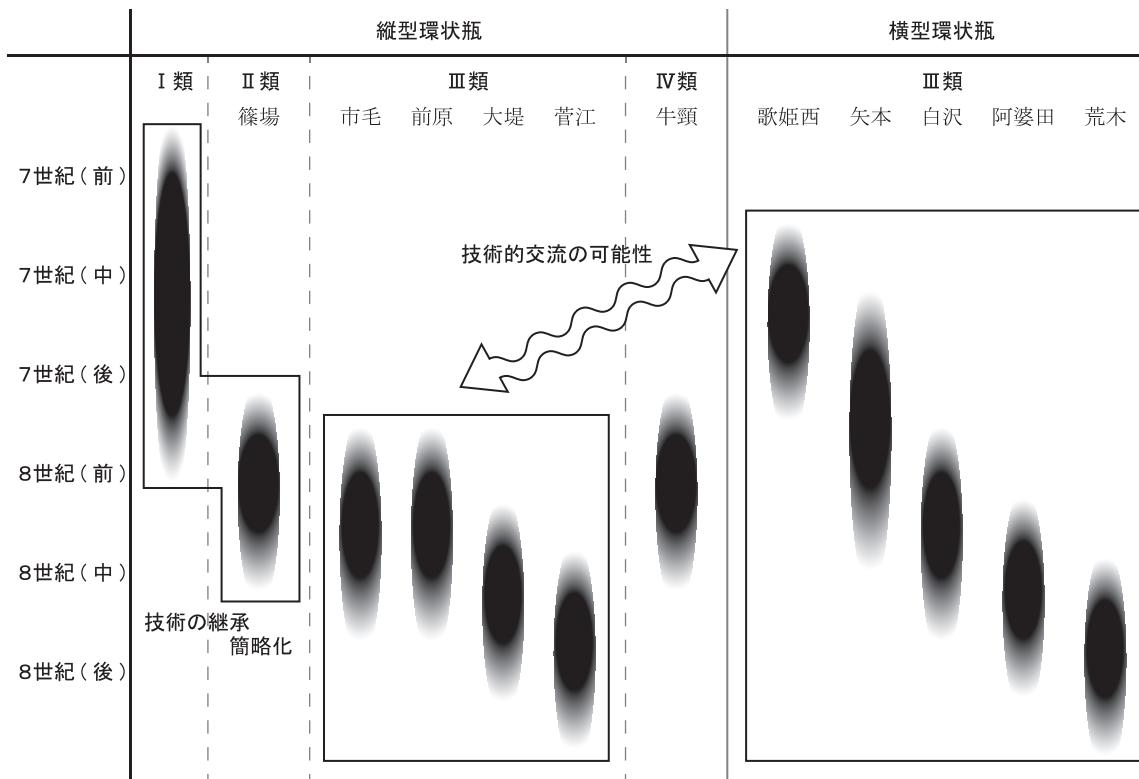
4. 環状瓶の性格

最後に環状瓶の性格について検討したい。古墳以外から環状瓶が出土した遺跡は12遺跡で、出土遺構については横穴墓が1遺跡、谷部、流路、溝などが3遺跡、建物跡に付随する可能性のある出土が1遺跡、窯跡からの出土が5遺跡、詳細不明が2遺跡である。

とくに消費地については資料も少なく詳細は明らかではない。現在のところ牛頸本堂遺跡群、荒木遺跡、市毛本郷坪遺跡、前原遺跡、矢本横穴墓群が消費地、あるいはその可能性が高い遺跡である。これらの遺跡の様相に加えて生産遺跡である窯跡資料を参照しながら古墳以外から出土した環状瓶の性格について考えていきたい。

（1）出土状況

牛頸本堂遺跡群では谷部から環状瓶が出土した。牛頸VIA期のものである可能性を指摘したが、当該時期の遺跡の様相は明確ではない。しかし、やや時期が下がった牛頸VIB期には、流滯水が著しかったとみられる谷部から、祭祀に使われたと考えられる遺物が多数出土している。調査報



第6図 縦型環状瓶と横型環状瓶の技術的関連性

告書によると、谷部から出土した遺物の検討から牛頸本堂遺跡群周辺に「村落寺院」とされる仏教施設が存在しており、この谷部が祭祀の場として利用されたことが指摘されている。^(注33) 環状瓶の所属時期に問題を残すが、祭祀の場で使われた可能性を考えたい。

荒木遺跡は、所在する丘陵周辺の河川流域に、砂入遺跡、袴狭遺跡、入佐川遺跡などの遺跡が確認されており、袴狭遺跡群と総称される。これらの遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての祭祀に使われた木製品が出土したほか、銅印や石帶、硯が出土したことから、第一次但馬国序あるいは出石郡衙といった官衙施設とそれに伴う祭祀跡と考えられている。^(注34) 袴狭遺跡群に含まれる荒木遺跡の環状瓶も律令祭祀に使用された可能性があろう。

次に市毛本郷坪遺跡と前原遺跡であるが小規模な調査のため、遺跡の性格も判然とはしない。両遺跡の環状瓶は他地域からの搬入品と考えられ、製作時期や遺跡の立地、周囲の遺跡の様相などから、筆者は、郡衙に関連する仏教的な祭祀遺跡の可能性を想定した。^(注35) 注目したいのは両者の立地で、ともに河川を見下ろす台地あるいは段丘上に位置することである。

最後に矢本横穴墓群である。本例はやや特異な形態をしているが、さしあたり環状瓶ととらえると、消費地の資料としては最も様相が明らかである。しかし、他例と異なり墳墓から出土した点で異質といえる。副葬品である点から古墳時代の環状瓶に類似した用途の可能性もあるが、その性格はむしろ、上述してきた古墳以外から出土した環状瓶と親和性が高い。それは矢本横穴墓群の造営主体が、近在する古代牡鹿郡家推定地の赤井遺跡を形成した人々と考えられているからである。矢本横穴墓群の29号墓から、「大舎人」墨書き土器が出土したことでも赤井遺跡と矢本横穴墓群が密接に関係することを示している。このように矢本横穴墓群11号墓から出土した環状瓶も

単なる副葬品ではなく、律令制下の祭祀に関わるものである可能性を示すものと考えられる。

（2）性格

さて、ここまで消費地と考えられる遺跡の様相から環状瓶の用いられた場についておぼろげながらいくつかの要素が浮かび上がってきた。第1に、地理的要素として河川や流滯水のある谷部など「水」に関わる点である。河川における祭祀の例は枚挙に暇がなく、牛頸本堂遺跡群や荒木遺跡でも谷部の流滯水や河川での祭祀が考えられる。8世紀以降の環状瓶が出土した消費遺跡のもう要素の一つとして「水」を挙げておきたい。第2に、遺跡の性格として官衙や仏教施設など祭祀を執り行う遺跡から出土する点である。この要素に関しては生産遺跡の様相からも推察できる。歌姫西窯跡群では金属器模倣器種や塔形土製品などに仏教的要素がみられ、南山城地域における寺院あるいは官衙関連施設へ搬入された可能性が指摘されている。^(注36) また、阿婆田窯跡群出土の環状瓶も薬壺形の須恵器壺や鉄鉢形の須恵器鉢と共に、こうした須恵器とともに官衙あるいは寺院などに供給されたことが想定されている。^(注37) さらに、篠場瓦窯跡の事例は焼成された瓦とともに寺院に供給された可能性が考えられよう。白沢窯跡群の環状瓶は、正確には生産遺跡からの出土と言い切れないが^g、白沢3・5号窯跡からは金属器模倣の須恵器や多種多量の硯が出土しており、官衙あるいは寺院への搬入も想定されている。^(注38)

以上で述べた2つの要素から古墳以外から出土した環状瓶の性格として、律令体制下にある各地域で製作され、官衙や寺院が執り行った、なんらかの祭祀に用いられた可能性が指摘できる。

5. おわりに

環状瓶は古墳時代終末期に製作が始まり、奈良時代まで製作が続けられた。これまで、副葬品として利用されなくなった環状瓶の使用実態は不明な点が多かったが、今回の検討の結果、律令体制下に祭器としての使用された可能性を指摘した。しかし、律令国家の中心であった畿内地域での出土例が少ない点をみると、環状瓶の祭器としての利用はどちらかといえば地方独自の展開であって、本来的には律令体制下の祭祀に利用されたものではないことも確かである。環状瓶を祭器として用いた地域間の関係については今後の検討課題である。

さらに製作技術の側面からみると3章で説明したように、縦型環状瓶に横型環状瓶の製作技術が採用され、同一の技術を用いて2種の環状瓶が製作されたと考えられる。両者の製作技術が収斂した時期は、8世紀初頭と考えられる。8世紀初頭は、古代地方官衙が全国的に設置された時期であり、近年の研究では同時期に古代国府が成立し、一部地域では7世紀後半以降に設置されていた地方官衙の再整備が行われた大きな画期とされる。^(注39) 今後は、こうした社会状況や地域間のつながりを踏まえて、須恵器製作者の技術交流の可能性を考えたい。本稿は、十数点の数少ない資料を操作し、憶測を重ねた予察であったが、これを機に律令体制下の祭祀についても見識を深め具体的な歴史像を描くこと、また特殊な須恵器からみえる地域間関係に迫ることを試みたい。

（なむら・たけひこ＝当調査研究センター調査課調査第2係調査員）

- 注17 青木 敬・石村 智・小田裕樹・金田明大・神野 恵 『奈良山発掘調査報告Ⅱ』(『奈良文化財研究所報』第93冊 国立文化財機構奈良文化財研究所) 2014
歌姫西窯跡群の資料は報告書内で7点の資料が環状形土器として報告されている。本稿では製作技術および形態から環状瓶と判断したものを挙げているが、一部は報告書内では環状瓶とは異なる器種である可能性も指摘されている。
なお、青木敬氏が環状形土器の変遷と特質について詳しく検討されており、重要な知見を明らかにされているにもかかわらず、拙稿(注4文献)では研究史として反映できていない。浅学を猛省し、お詫び申し上げる。
- 注18 桂田峰男 『菅江遺跡発掘調査報告書』 山東町教育委員会 1987
- 注19 生駒勝浩・宇津裕人 『古代の須恵器—新技術の伝来—』 富山県埋蔵文化財センター 1994、『富山県福野町 安居窯跡群発掘調査レポート—平成12年度富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座一』 富山県文化振興団埋蔵文化財調査事務所 2001
- 注20 上野 章 「安居窯跡群」(『富山県ボランティア埋蔵文化財録護活動事業発掘体験講座 婦負郡婦中町勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東砺波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告』(『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告』第21集 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所) 2003
- 注21 武田寛生 「篠場瓦窯跡」『篠場瓦窯跡・上海土遺跡』(『静岡県埋蔵文化財センター調査報告』第27集 静岡県埋蔵文化財センター 56~418頁) 2013
- 注22 鴨志田篤二 『平成6年度市内遺跡発掘調査報告書』 ひたちなか市教育委員会 1995、猪狩俊哉・稻田健一・名村威彦・片平雅俊 「環状瓶の新2例—ひたちなか市市毛本郷坪遺跡と日立市前原遺跡一』(『茨城県考古学協会誌』第32号 茨城県考古学協会 79~92頁) 2020
- 注23 注22第2文献、前原遺跡の資料については公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化課文化財調査事務所の稻田健一氏を通して日立市郷土博物館の猪狩俊哉氏、日立市の片平雅俊氏からご教示いただいた。ここに記して深くお礼申し上げます。実見に際しましては市毛本郷坪遺跡の資料とともに稻田氏に大変お世話になった。記して深謝いたします。
- 注24 『平城京左京三条一坊一・二坪の発掘調査(平城第495次調査)現地説明会資料』 国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部 2012
- 注25 注17文献
- 注26 佐藤敏幸・河村美佳・瀧川 渉・関 博充・女鹿潤哉・赤沼英男・手代木美保・片岡太郎・高妻洋成・赤田昌倫・熊谷公男 『矢本横穴墓群II—飛鳥・奈良時代における牡鹿地方の墓—』(『東松島市文化財調査報告書』第7集 宮城県東松島市教育委員会) 2010
矢本横穴墓群については、前号掲載分の脱稿後に確認したため、前号第1図に反映できていない。
- 注27 注17文献
- 注28 注4文献、注22第2文献
- 注29 阪口俊幸 「橿原市南山古墳群第4号墳」(『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』 第Ⅱ分冊—中国、四国、近畿、中部以東篇— 埋蔵文化財研究会・大阪府埋蔵文化財協会 486~487頁) 1987
- 注30 阪口俊幸 「奈良県南山古墳群」(『日本考古学年報』36 日本考古学協会 240~242頁) 1986
- 注31 金 正基・車 勇杰・朴 永福・趙 由典・洪 性彬・崔 孟植・鄭 桂玉・宋 必潤・柳 寛乾『楊

- 州大母山城發掘報告書』（『翰林大學校博物館研究叢書』4 文化財研究所・翰林大學校博物館
1990
- 注32 金 元龍・岡崎 敬・韓 炳三 『韓國古代』（『世界陶磁全集』17 小学館） 1979
- 注33 注10文献
- 注34 注16文献
- 注35 注22第2文献
- 注36 注17文献
- 注37 森 正 「阿婆田窯跡群の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第36号 （財）京都府埋蔵文化財調査
研究センター 17~22頁） 1990
- 注38 注12文献
- 注39 山中敏史 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房 1994、大橋泰夫 『古代国府の成立と国郡制』 吉
川弘文館 2018

図版出典

- 第4図5：注17文献を再トレース 6～8：注4文献を加除修正し再トレース 9・10：注22第2文
献を再トレース
- 第5図12：注26文献を再トレース 13：注29文献を再トレース 14：注31文献を再トレース
- 第6図：筆者作成

資料紹介

法成寺跡出土の甲冑について

加藤 雄太・山本 尚人

1. はじめに

昭和57(1982)年、京都市上京区広小路通寺町東入ル中御靈町の元立命館大学広小路学舎において京都府立医科大学学舎等の建設に伴う発掘調査が実施された。法成寺の跡地に比定された当該地の調査では近世の墓が多数検出された。その中に甲冑を着装させて埋葬された特異な事例が報告されているが、出土状況の写真と鎧が出土したと本文に記載されているのみであった。そこで、本稿で改めて報告する。なお、同遺構に関して遺構番号は付されていなかったので、本稿では「甲冑墓」と呼称する。

(加藤雄太)

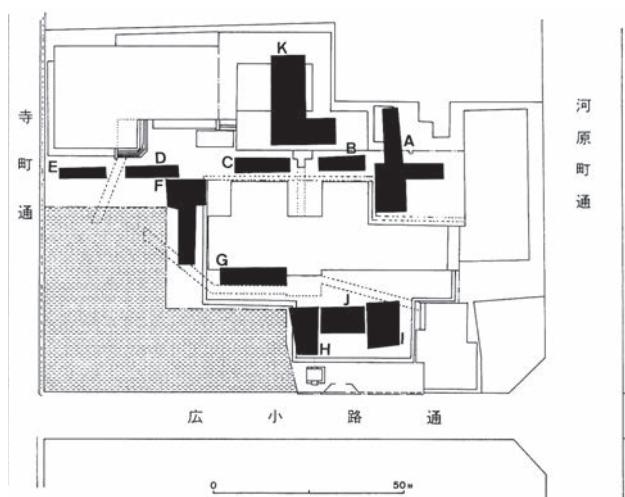


第1図 調査位置図
(国土地理院 1/250,000 京都東北部)

2. 調査概要

調査では断続的な6本のトレンチを入れており、報告によると「旧学校建物・地下道等によつて多くの部分は攪乱を受け、文化面が顯著に残存する部分は少なかつたが、東端において各種の墓坑を検出したため、一部拡張した。層位としては、近・現代の堆積層を経て、現地表下、約80cmで墓坑群を検出し」たとある。甲冑墓は拡張したAトレンチの東端で検出された(第2図)。Aトレンチを東から撮影した写真1下部の白枠内が甲冑墓である。他の土坑には角柱形の石材がまとめて廃棄されている状況が観察できる。寺院移転に伴つて処分されたと考えられる。

Aトレンチは元禄4(1691)年の『京大絵図』^(注2)に「遣迎院」がみえるように遣迎院の寺域であった。明治6(1873)年時点では北之辺町に位置し、明治17(1887)年「上京区第拾弐組北ノ邊町全図」^(注3)によると、寺域は寺町通りに面する寺地と裏手の畠



第2図 法成寺跡トレンチ配置図
(S=1/2000 注1文献の図を一部改変)



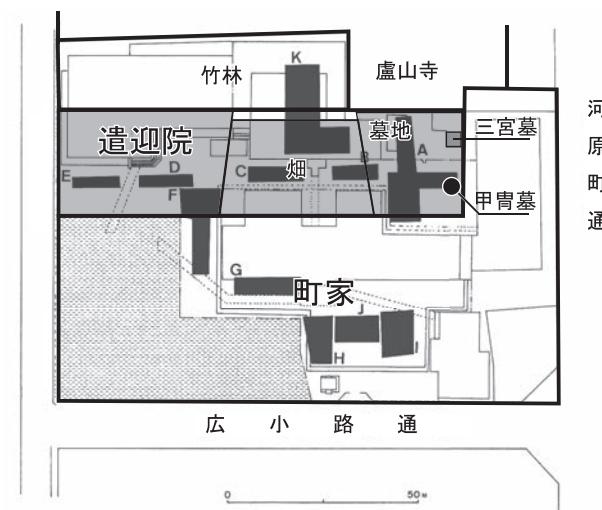
写真1 法成寺跡調査Aトレンチ 白枠が甲冑墓位置(東から一部改変)



写真2 甲冑墓坑出土状況(北から)

とさらに奥に墓地があったことがわかる。A トレンチはこのうち墓地にあたる(第4図)。また、現在は盧山寺が管理する靈元天皇第三皇子の三宮(1675~1677)の墓は、この頃遣迎院の寺域であった。遣迎院は、天台宗寺院で安阿弥快慶作と伝わる釈迦如来、阿弥陀如来の二尊を本尊とし、元三大師自刻像を安置していたという。^(注4)天明8(1788)年の天明の大火にて類焼し、その後本尊・書院・聖天堂、地蔵堂が再建される。

遣迎院は昭和30(1955)年に鷹峯光悦町に移転、その後立命館大学の学舎となり、今回の調査に至る。



第3図 調査トレンチと明治17年の遣迎院の推定位置

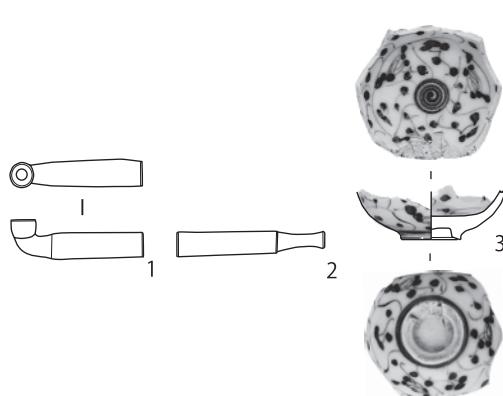
甲冑墓の状況と遺物について 甲冑墓については、報告に記載された情報が少なく、不明な点があるものの、出土状況の写真が多く残され、かつ周囲の遺物も取り上げられていることからある程度の検討が可能であった。

まず、堆積状況であるが、墓坑は焼土層を掘削して形成している。当該地は宝永の大(1705)と天明の大(1788)に罹災している。宝永年間時点では当該地の背後は御土居であり、周囲に建物がないことから焼土が生じるほどの被害があったとは考え難い。これに対して享保年間に御土居が取り壊されて町家が建てられた記録が残されていることから、天明の大(1788)の焼土ではないかと考えられる。墓は暗褐色の埋土であるが、この土壤は黒褐色の造成土により削平されている。

甲冑と同じコンテナ内に収納されていた遺物には、未洗浄の黒褐色土が付着した美濃磁器の椀1点と鎧の一部が融着したキセルがある。美濃磁器は化学コバルトが用いられた花捺文の椀である。^(注5)明治後半代の資料ではないかと考えられる。付着していた黒褐色土が甲冑墓を削平する黒褐色造成土に由来するのであれば、造成が行われたのは明治後半代以降であると推定される。当該地から遣迎院が移転するのは昭和30(1955)年のことなので、それ以後の立命館大学が設置される

時点の造成である可能性がある。また、キセルの年代は判然としないが直線的な形態で、脂返しがほとんどないことから19世紀前半代の資料と考えられる。^(注6)上記の内容から、甲冑墓は、天明の大(1788)以降に掘削された江戸時代後期の墓坑であると判断した。

甲冑墓について 甲冑の出土状況は写真2に掲載したとおりである。頭部を西に向かって埋葬されたようである。遺体の肩部から兜が出土しているが、



第4図 関連出土遺物(S=1/3)

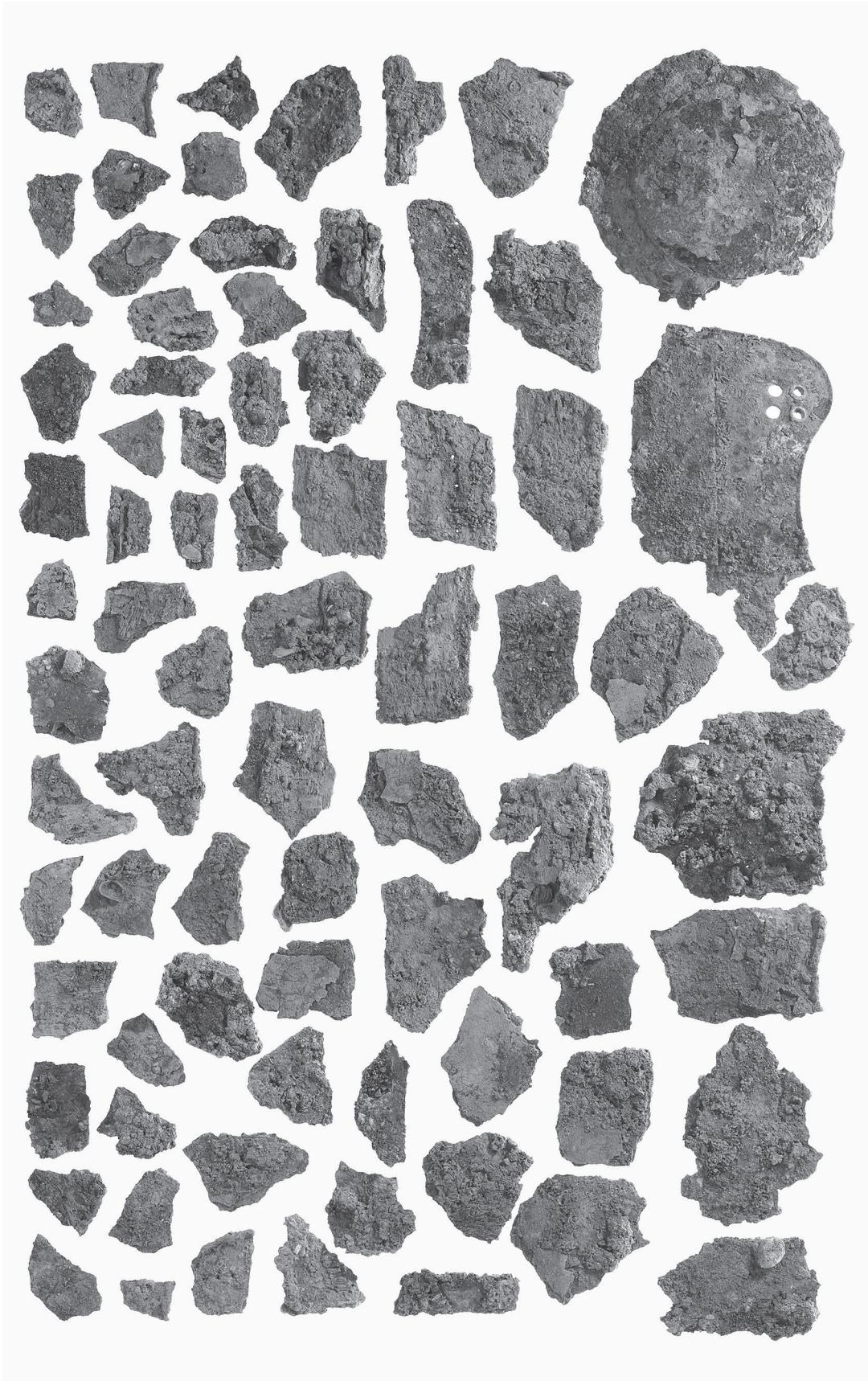


写真3 甲冑墓出土甲冑(S=1/4)

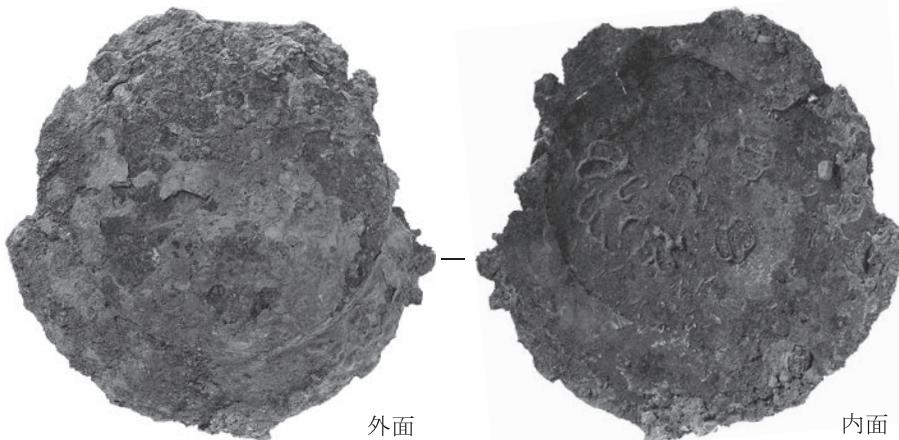


写真4 甲冑兜($S=1/3$)

被っていたものがずれ落ちた可能性がある。胴部は着装していたらしく、内側に骨片が付着していた。籠手や佩楯、臑当と考えられる破片はみられず、小具足を^(注7)着装せずに安置されたようである。

写真3では、まとめて収納されていた甲冑のうち、残存状況の良好な資料を撮影したものである。掲載総数は69点である。細片ではあるが^{しころ}鞆や草摺、胴部の一部とみられる破片があるが、状態が悪く接合を確認出来ていない。

兜の内、畳兜(提灯兜)の鉢部が残存していた(写真4)。畳兜(提灯兜)は、兜の鉢を鞆と同じように威し下げた、提灯のようにたためる兜で、江戸時代によく製作された。基本的に畳兜(提灯兜)の頭にかぶる鉢の部分は正円形に形作られるた

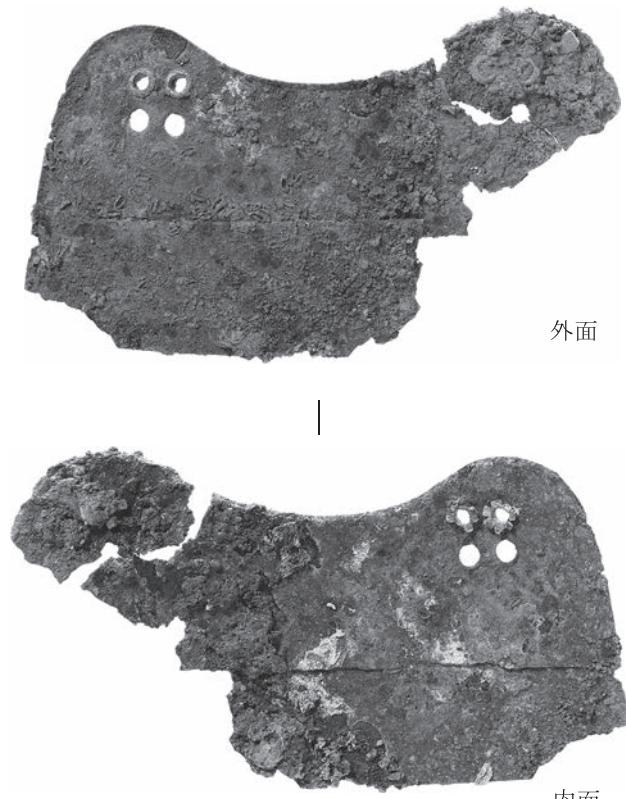


写真5 甲冑胴部($S=1/3$)

め、残存部で鉢径を出せ、直径は13.5cmを測り、残存部の最大径は18.6cmを測る。鉄板厚は1.5mmを測る。表面には黒漆の痕跡があり、本来は黒漆塗りの兜であったと考えられる。鉢以外の鞆が欠損しており、正面の特定は困難である。全国的に畳兜(提灯兜)の出土例は確認できず、初例の可能性がある。

胴部の内、前胴の胸板と、前立拳1段が良好に残存していた(写真5)。本資料は当世具足である。胴の種類は、形式上では横矧胴に分類され、横長の鉄板を鎧によって矧いだ胴である。桶側胴とも呼称する。胴の構成による分類では、当世具足の胴によく用いられた、二枚胴であると考えられる。胸板は平造で、首や肩口への当たりを和らげるために全体に丸みがある。覆輪は用い

ず、縁に沿って前方に小さく折り返す捻返がある。また、高紐を取る高紐付の穴が4孔あけられており、周縁を飾る花弁状の刻みが施された円形の鶴目(シトドメ)が残存している。当世具足の胸板で、出土状況が明瞭に判明している事例は現状確認できない。

近世墓において、甲冑の着装状態での埋葬例は極めて珍しく、おそらく京都府内において初出ではないだろうか。本資料は、状態が悪く現状では特徴的な部位しか判別できない。クリーニングを施して威穴等が判明すればある程度本来の形状まで配置できると思われ、そうすれば埋葬状況が一層明らかにできよう。
(山本尚人)

Fトレンチ出土の禁裏御用品 甲冑墓の報告にあたって法成寺跡の資料を精査したところ、寺格を考える上で重要な資料を確認した。第5図は寺内にも比定されるFトレンチより出土した禁裏御用品である。菊御紋に竹笹垣文を表現している。下賜など特別なルートで出回った禁裏御用品が出土したことは、靈元天皇の第三皇子の三宮が葬られたことに加えて、遣迎院が禁中と関わりのある寺院であったことを示しており、遣迎院の墓域で検出した甲冑墓の被葬者がそれなりの人物であったことを示唆すると思われる。
(加藤雄太)



第5図 Fトレンチ出土禁
裏御用品(S=1/4)

3. おわりに

今回の報告において、被葬者の特定やなぜ甲冑を着装して埋葬されたのかなどは明らかにできなかったが、遣迎院は江戸時代において武州の東叡山寛永寺の末であったことから、武家との関係も深かったのではないだろうか。甲冑の状態は劣化が著しいため、まずは資料の紹介を行った。

(加藤雄太)

(かとう・ゆうた=当調査研究センター調査課調査員)

(やまもと・なおと=大分市教育委員会事務員)

注1 長谷川達・小池 寛「法成寺跡」(『京都府遺跡調査概報』第8冊-4 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注2 大塚 隆編『慶長・昭和 京都地図集成』柏書房 1994

注3 『上京区地籍図 自第11組 至第15組』1884(京都府立京都学・歴彩館所蔵 京都府立京都学・歴彩館
京の記憶アーカイブ から)

注4 下中邦彦 編『京都市の地名』(『日本歴史地名大系』第27巻 平凡社) 1979

注5 山下峰司「近代「美濃焼」相場と出土遺物」(『江戸遺跡研究会第31回大会 遺物にみる幕末・明治
発表要旨』江戸遺跡研究会) 2018

注6 江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001

注7 用語については下記を参考にした。

山岸素夫・宮崎真澄『日本甲冑の基礎知識 第二版』雄山閣 1997

9. 川向遺跡第2次・川向南古墳群

所在地 京丹後市丹後町成願寺

調査期間 令和元年10月23日～令和2年1月20日

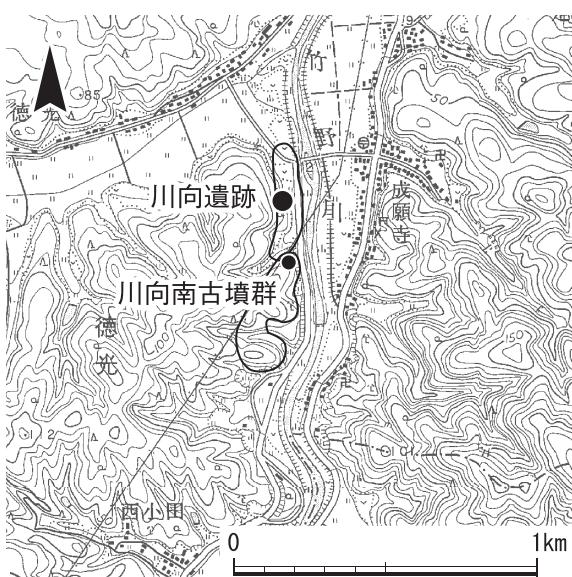
調査面積 350m²

はじめに 川向遺跡と川向南古墳群は、丹後半島の基部を北流して日本海に注ぐ竹野川下流の左岸に所在する。川向遺跡は、古墳～奈良時代の遺物散布地である。今回の発掘調査は、間人大宮線民安関連道路新設改良業務の実施に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。川向遺跡の調査対象地は、丘陵尾根の東側裾部に位置する。裾部に狭長な小規模テラスが存在し、その一部の地表面に五輪塔など石造物が散乱していた。また、ほぼ同一場所のテラス上方3m付近にも五輪塔や石仏の一部が列状に点在していた。この現況から、この地に中世～近世の墓地が存在するとみられた。

調査概要 石造物を確認した地点を中心に、人力による発掘調査を実施した。斜面部の調査で地山(砂質あるいは粘土質の堆積岩)面を検出したが、人工的な地形改変は認められなかった。また、調査地南部では、土砂崩れの痕が確認できた。斜面で検出した石造物は、標高15～16m付近にあって数か所に分かれていたが、ほぼ横一列に並んでいた。出土遺物は石造物だけであり、石造物の内訳は、石仏7点・五輪塔26点で、合計33点である。川向南古墳群では尾根先端部にトレンチを設定したが、表土直下で地山の真砂土を確認した。無遺構、無遺物であった。

まとめ 川向遺跡では、遺構が確認できず墓の地表施設である石造物のみが出土した。出土した石造物は、原位置から二次的に運ばれ、斜面上に並べ置かれたものと判断される。裾部テラスに散乱していた石造物は、元々は斜面に置かれたものが転落したものと考えられる。これらの石造物が遠方から運ばれたとは考えにくく、調査地近辺に元々の墓が存在したと考えられる。石造物の多くは、地元の凝灰岩を使用し、15～16世紀代の制作とみられる。なお、今回の調査対象地内には古墳は存在しなかった。

(竹原一彦)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 網野)

10. 満願寺跡第2次

所在 地 舞鶴市万願寺地内

調査期間 令和元年7月4日～令和2年2月4日

調査面積 1,100m²

はじめに 今回の発掘調査は、万願寺川支渓通常砂防(防災安全補正)事業に伴い京都府中丹東土木事務所の依頼を受けて実施した。平成29年度に京都府教育委員会によって試掘調査(第1次調査)が実施され、その成果を受けて本調査を実施することになった。満願寺跡は、五老ヶ岳、佐武ヶ嶽など連なる山稜の谷部に位置している。江戸時代に書かれた『紫雲山縁起』などの記録を基に遺跡範囲が設定されたが、遺跡範囲内には弥生時代以降の遺物が散布している。『紫雲山縁起』には、建保年間(1213～1219)に創建され、永禄年間(1558～1570)に焼失したが、寛文年間(1661～1673)に再興されたと伝わっている。現存する建物は江戸時代に再建されたもので、昭和44年に現在の場所に移築された。江戸時代の建物の礎石群は、調査地の西側に位置する高台に残っている。

調査概要 調査地は、現在の満願寺の北東の谷部に位置している。狭小の谷部に位置しているため、調査は北側の谷奥から開始し、谷奥部を1トレンチ、手前を2トレンチとした。

(1) 1トレンチ トレンチ北部は地表下約0.5mで谷奥、谷斜面からの流入土が厚く堆積していた。南部では地表下約0.5mで室町時代の礎石建物1、鎌倉時代の礎石建物を2・3・4を確認した。礎石建物のほか、東西方向の石組み溝や土師器が出土する土坑などを確認した。

建物群は、鎌倉時代に造成されたと考えられる平坦面上に連綿と構築されている。室町時代の礎石建物は、南北約3.8m、東西約5mを測る。礎石間は約0.9mを測る。南北列は、礎石間が約1.8mと広いことから、内陣のような施設を持つ建物を推定することができる。この建物規模は、江戸時代に再建された建物や現存する満願寺に類似する規模である。

鎌倉時代の礎石建物2は、南北3間(約5m)以上、東西5間(約10m)以上を測る。礎石間約1mを測る(写真1)。礎石建物3は若干位置を南に移動し、その規模は南北2間(約3.4m)以上・東西3間(約5.4m)以上、礎石間約1.3mを測る。礎石建物2に伴う整地層の下層で検出したことから、2棟は、若干の時期差を持つと考えられる。礎石建物4は、礎石建物2とほぼ同じ位置

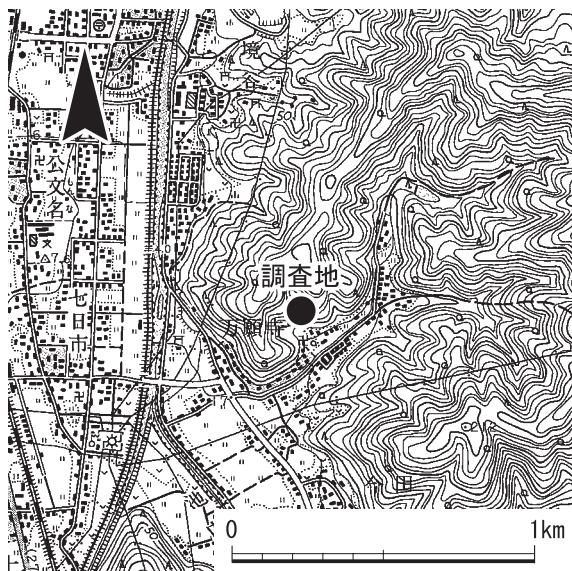




写真1 鎌倉時代礎石建物1(南から)



写真2 鎌倉時代石組み溝(南西から)

の下層に位置しており、その規模は南北3間(約5m)以上・東西5間(約9.2m)以上、礎石間約1.1mを測る。礎石建物4は地業痕跡が明確に認められ、上部構造物の重みなどで礎石が沈みこまないような工夫が認められる。また、礎石建物2は、礎石建物4の礎石の上に石材を置くものも認められる。礎石建物4を覆う地層には、炭が多く混じることから、火災により焼失したものと考えられる。この炭層からは、土師器の他に、貿易陶磁器が多く出土している。鎌倉時代の建物群では、建物構造を示すような特徴が見られないことから、復元が困難である。

建物群の他に、礎石建物3が造営された時期には、東西方向の石組み溝が構築される(写真2)。石組み溝は長さ約20m、幅約0.3mを測り、西から東へ若干の傾斜が見られる。溝を構築する石材には、被熱しているものも認められる。これらは、火災時に被熱した石材を再利用したものと考えられる。

(2) 2トレンチ 北部では1トレンチ側からの土砂崩れと思われる堆積を確認した。石材を多く検出したが、建物に伴うものか確認することはできなかった。南部では、素掘り溝を1条確認した。トレンチ東壁断面の観察から、江戸時代の畑に伴う耕作溝と判断した。

まとめ 今回の発掘調査では、1トレンチで鎌倉時代から室町時代の遺構を検出した。2トレンチでは土砂崩れや江戸時代の耕作により満願寺に伴う遺構は確認できなかった。1トレンチで検出した建物群の性格は、仏具の出土が希薄であること、貿易陶磁器の壺類が多く認められるなどから、本堂以外、例えば僧坊などの可能性も考えられる。

今回の発掘調査によって満願寺が鎌倉時代に創建されたという伝承を確認することができた。また、創建から現在に至る満願寺の変遷を追える重要な調査成果と考えられる。

(竹村亮仁)

11. 菖蒲谷口遺跡

所 在 地 舞鶴市万願寺菖蒲谷

調査期間 令和元年12月10日～令和2年2月27日

調査面積 500m²

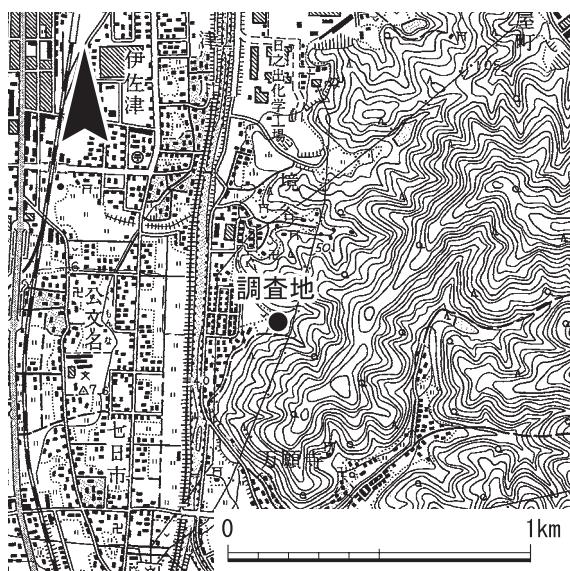
はじめに 今回の調査は、西舞鶴道路事業に伴い国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。菖蒲谷口遺跡は、伊佐津川の流れる市街地を西に臨む広い谷部に位置している。東側に迫る丘陵尾根筋には中世山城の満願寺城跡が存在している。過去に弥生土器などが表面採集され、遺物散布地として知られていたが、これまで発掘調査は行われていない。

調査概要 調査は1～8のトレンチを設定し、現代の埋め土や耕作土を重機により除去したのち、人力精査により遺構・遺物の検出に努めた。その結果、主に丘陵斜面地に当たる1～6トレンチでは、後世の改変により遺構・遺物を確認できなかった。一方、丘陵斜面から平坦面に移った7・8トレンチでは、弥生時代から奈良・平安時代の土器が出土し、遺構として弥生時代の柱穴を複数検出した。7トレンチは4×20mのトレンチである。現地表下約1.5mの地山面で、4基の柱穴が一直線に並ぶ状況を確認した。柱の大きさは直径45～55cm、柱間寸法は2.1～2.4mを測る。うち2基の柱穴から弥生土器片が出土した。他の柱穴からも弥生土器が少量出土している。時期は弥生時代後期である。8トレンチは7トレンチに近接する4×15mのトレンチである。7トレンチと同じ遺構面が広がり、柱穴1基を検出した。柱穴内と遺構面から弥生時代後期の土器片が出土した。

まとめ 今回の調査では、7・8トレンチにおいて弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。7トレンチの柱穴列は4基分の柱穴で構成され、柵のような遺構とみられる。8トレンチでは柱穴1基のみであるが、弥生土器が出土した。

今回の調査で、弥生時代の遺構・遺物が検出されたことは大きな成果であり、集落の広がりが想定される結果となった。また、古墳時代から奈良・平安時代の土器が出土したことから、後世の土地改変以前には、調査地周辺にも当該期の遺跡が存在していた可能性がある。

(黒坪一樹)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 西舞鶴)

いぬかい 12. 犬飼遺跡第4次

所在地 亀岡市曾我部町法貴中溝・綿打川

調査期間 令和元年5月15日～8月9日、令和元年11月7日～令和2年3月12日

調査面積 2,600m²

はじめに 犬飼遺跡は、亀岡市に所在する古墳時代から中世にかけての集落跡である。遺跡周辺には扇状地が広がり、山麓には古墳群や城跡等が分布する。当遺跡では、すでに第2・3次発掘調査で古墳時代から古代の建物や中世の方形居館等を検出している。

今回の調査は、国道423号（法貴バイパス）防災・安全交付金事業に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要 今回の調査は、まず小規模調査として調査区を10か所設定し、その結果をふまえて調査範囲を拡張した。調査では、遺物包含層の直下より古墳時代の溝1条・掘立柱建物2棟・竪穴状遺構のほか、土坑等を約190基検出した。

古墳時代の溝（SD16）は、調査地東部を南東から北西方向にかけて延びる。幅0.3～0.8m、深さ0.2～1.0m、検出長40.2m以上を測る。断面形態はV字形あるいはU字形を呈する。断面観察の結果、東西方向の横ずれが生じた痕跡を確認した。埋土上層から前期の小型丸底壺・高杯・甕等が出土しており、完形に近いものを含む。掘立柱建物は、桁行2間、梁行3間のもの（建物1）と、桁行2間、梁行2間以上のもの（建物2）の2棟がある。建物1の柱穴より古墳時代の土師器、建物2の柱穴より古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。両建物の主軸は北から西に20°振るもの、出土遺物の年代から時期差があると考えられる。建物1の一部の柱穴には、前述した溝と同様の横ずれが確認できるが、建物2の柱穴には確認できないことから、古墳時代後期以前



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)

に何らかの自然災害が発生した可能性が考えられる。

まとめ 調査地の西側に法貴北古墳群、南西側に法貴峠古墳群が分布する。今回の調査結果、これらの古墳群と関連する可能性がある集落域の一端が明らかになった。また、古墳時代の溝（SD16）は、北側に隣接する第5次調査地で検出した溝（SD01）と同一のものと考えられ、同様の横ずれを確認している。今後も周辺の調査事例とあわせて亀岡盆地南西部における集落や土地利用について検討していく必要がある。

(尾崎裕妃)

13. 犬飼遺跡第5次

所 在 地 亀岡市曾我部町犬飼灘羅

調査期間 令和元年11月5日～令和2年2月12日

調査面積 1,950m²

はじめに 犬飼遺跡は、亀岡市南西部の法貴谷川および犬飼川により形成された扇状地上に位置する。今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。犬飼遺跡では、平成30年度および令和元年度の第2・3次調査において、13世紀後半から14世紀前半にかけて営まれた堀で三方向を囲まれた方形居館ならびにその関連遺構を検出した。犬飼遺跡の南東方向に位置する金生寺遺跡でも、令和元年度の第5次調査において、12世紀後半から13世紀前半頃の掘立柱建物や井戸、区画溝等を検出しており、当該地域における中世初頭の集落について明らかになってきている。

調査概要 今回の調査は、小規模調査として調査区を6か所設定し、その結果をふまえて調査範囲を拡張した。調査の結果、古墳時代前期の遺構・遺物および中世の遺物を検出した。

古墳時代前期の溝(S D01)は、調査地南西部を南東から北西方向にかけて延びており、検出長約40m、幅0.6～1m、深さ0.3～0.7mを測り、断面形態は逆台形状である。調査地南側隣接地において実施した犬飼遺跡第4次調査でも、その延長を確認している。埋土上層から古墳時代前期の土師器小型丸底壺・高杯・壺等が複数出土しており、完形に近い個体も含まれる。また、SD01の断面観察により、北東方向への横ずれが確認できた。この横ずれについては、調査地南西方向に位置する靈仙ヶ岳の斜面崩落により土砂が流入し、その土圧によって発生した可能性が高い(独立行政法人奈良文化財研究所村田泰輔氏のご教示による)。

その他、調査地内全域において複数のピット・土坑状の遺構を検出したものの、遺物を伴わず、時期決定には至らなかった。遺物包含層から中世の遺物が少量出土した。

まとめ 今回の調査では、古墳時代前期に埋没したと考えられる溝を確認した。また、この溝の断面に残る横ずれ痕跡によって、調査地周辺においてかつて発生した自然災害を知ることができたが、今後、防災に活かすための資料としても重要なものである。

(山本 梓)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)

14. 金生寺遺跡第5次

所在地 亀岡市曾我部町法貴コモ原

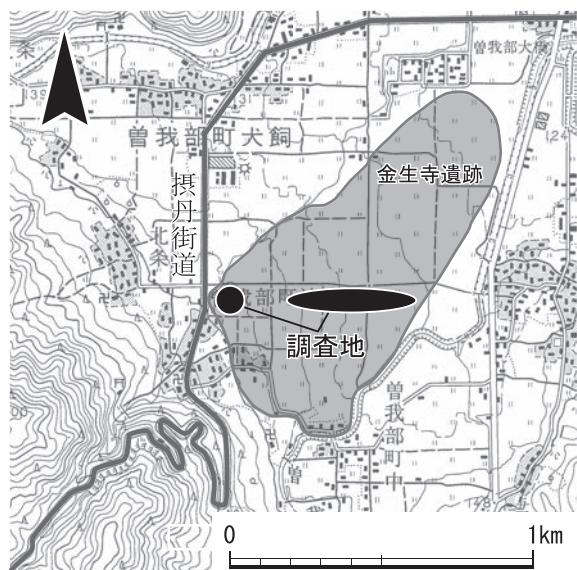
調査期間 令和元年5月7日～令和元年10月3日

調査面積 3,159m²

はじめに 金生寺遺跡は亀岡盆地南西部の曾我部町に所在する。法貴谷川によって形成された扇状地上に位置しており、丘陵裾に沿うように近世の摂丹街道が通る。国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の実施に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受け発掘調査を行った。

調査概要 標高約129～146m付近に6か所の調査区を設定した。山麓部西部の調査区(909m²)では、12世紀後半から13世紀前半の集落に関係する遺構(掘立柱建物、井戸、溝状遺構等)と遺物を確認した。掘立柱建物は4棟検出しており、調査区の北西部と南東部の2か所に分布する。北西部では梁行2間・桁行3間の側柱建物1棟を検出した。約20m南東の地点では梁行3間・桁行3間の総柱建物1棟と、小規模な建物2棟を検出した。総柱建物の北側で井戸を1基検出した。井戸は、一辺約1.1m、深さ約2mを測り、井戸枠が遺存していた。その構造は方形の縦板組支柱横桟留である。井戸枠内や井戸検出面からは、土師器・瓦器、木製品、角礫等が出土しており、出土状況から井戸廃絶・埋没後に直上で祭祀を行い、土師器皿や瓦器碗を投棄したと考える。また、南東部の建物と井戸の東側を区画するように位置する溝状遺構を検出した。検出長約20.5m、同幅約1.5m、同深さ約0.3mを測る。この調査区では、遺構面の至る所で南西の丘陵部からの土石流堆積が広がっており、これらの堆積の上に遺構が分布する。

中世の遺構群から約25m北西の地点で東西3.3m、南北2.3mの範囲内に石塔の部材3点を含む拳大の角礫で構成された集石遺構1基を検出した。内部から12世紀から17世紀までの遺物が出土



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)

しており、17世紀以降に構築されたと考える。

東側の標高約129～139m付近の調査区5か所では、いずれも氾濫や土石流の可能性のある洪水堆積層と、それらの間に点在する安定面を検出した。

まとめ 中世初頭頃の集落の構造を知ることができた遺構群を確認できた。また、土石流堆積上に集落を形成し、一定期間の生活拠点としていたことがわかり、周辺地域の災害史と集落形成について検討していく上での大貴重な成果が得られた。

(荒木瀬奈)

15. 平安京跡(平安京左京一条三坊三町)

所 在 地 京都市上京区下長者町通新町西入敷ノ内町

調査期間 平成30年11月7日～平成31年2月28日

平成31年4月16日～令和2年3月9日

調査面積 1,280m²

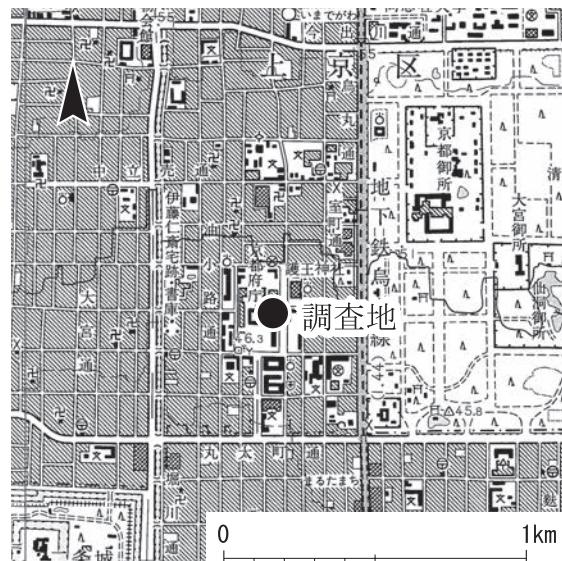
はじめに この調査は、新行政棟・文化庁移転施設整備事業に伴って京都府からの依頼を受けて実施した。調査地は、平安京の左京一条三坊三町と近衛大路にあたる。当該地は、平安時代には修理職の厨町である修理職町が位置し、室町時代には下御靈神社、桃山時代には大名屋敷地として利用された。江戸時代には町家が立ち並んだが、嘉永大火(1854年)の後は一帯を幕府が買い上げ、京都守護職の上屋敷が設置された。上屋敷の敷地は、現在の京都府庁敷地に踏襲されている。調査地周辺では、昭和63年の調査で西洞院大路と近衛大路の交差点が、平成28・29年の調査では戦国時代の堀や京都守護職の上屋敷に伴う建物跡などが検出されている。

調査概要 調査は、工事の進捗に応じて3区に分割して実施し、3つの遺構検出面に対して調査を実施したが、最終面の下層で遺構を確認したため、一部4面目の調査を実施した。

第1面では、近代、幕末、江戸時代後期の遺構を確認した。近代は井戸・石組み溝・暗渠などを検出した。幕末は井戸や竈、廃棄土坑などを検出した。江戸時代後期は道路側溝・井戸・廃棄土坑・漆喰溝・竈・トイレ遺構・礎石などを検出した。遺物は肥前系磁器と京・信楽系陶器を主体とし、瀬戸磁器、清朝磁器、国産陶器、土師器皿、土製品、瓦、金属製品、石製品などのほか、「府廳」と書かれた椀や、禁裏御用品、尾形周平の小杯が出土している。

第2面では、江戸時代中期から桃山時代の遺構を確認した。江戸時代中期は路面・道路側溝・地下室・井戸・廃棄土坑などを検出した。江戸時代前期では路面・道路側溝・築地跡・礎石立ち建物・地下室・井戸・廃棄土坑などを検出した。桃山時代では集石遺構や柱列、廃棄土坑などを検出した。遺物は肥前陶磁器、瀬戸陶器、そのほかの国産陶器や中国製磁器、土師器皿、土製品、瓦、金属製品などのほか、金箔瓦やガラス玉が出土している。

第3面では、室町時代後期から平安時代の遺構を確認した。室町時代後期では、堀3条(S D81・3550・3370)と布掘りの柱列(S A3425・(国土地理院 1/25,000 京都西北部・京都東北部)



第1図 調査地位置図

3823)を検出した。S D81は幅約4.5m、深さ約2mを測る堀で、北半部の底は一段高く、南壁と北壁の勾配が異なることから造成後拡張された可能性がある。S D3550は幅約2.7m、深さ約1.4mを測る堀で、東から南西に湾曲して掘削されている。西側が調査地の南半部中央付近で止まることが特筆すべき点である。S D3370は幅約5m、深さ約2mを測る堀で、東西方向に掘削されているが、調査地の西端付近で南側に湾曲する。布堀り柱列は幅約0.8m、深さ約1.2mを測る東西方向のS A3425と、幅約0.8m、深さ約0.9mを測る南北方向のS A3823を検出した。塀や櫓の基礎部分と想定される。いずれも調査区外にまで延びるため全容は確認できなかった。そのほか、近衛大路の南側溝と想定されるS D77や石組み井戸・柱列・廃棄土坑などを検出した。遺物は土師器皿、瓦質土器、瓦、瀬戸陶器をはじめとする国産陶器、中国製の青花磁器、青磁、白磁などが出土した。

第4面では、平安時代の造成痕跡、柱穴などを確認し、平安時代末から鎌倉時代初頭の近衛大路の南側溝であるS D78や、平安時代の北東から南西にのびるS D3881、門の軸摺り石と想定されるほぞ穴を設けた礎石が4基出土した平安時代末のS K2258を検出した。

まとめ 今回の調査では平安時代から近代のかけての各時代の遺構を検出した。その中でも室町時代の堀S D81・3370・3550、布堀り柱列S A3425・3823は、防御的な性格を有した「構」の一部とみられる。堀の埋土の堆積状況などから、南側を守る構造を有していたことが明らかとなった。戦国時代の当該地の在り方を考える上で重要な成果である。また、室町時代のS D77と、平安時代末から鎌倉時代初頭のS D78の2条の溝は、近衛大路の南側溝であり、路面幅の変化を示す事例と考えられる。

(加藤雄太)

16. 長岡京跡右京第1201次・開田遺跡

所 在 地 長岡京市神足2丁目地内

調査期間 令和2年1月7日～同2月28日

調査面積 270m²

はじめに 今回の発掘調査は、都市計画道路御陵山崎線(第3工区)無電柱化推進事業に先立ち、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京右京七条一坊十三町にあたり、開田遺跡の範囲にも含まれる。開田遺跡は、これまでの調査で、旧石器時代から近世にかけての集落遺跡であることが明らかになっている。

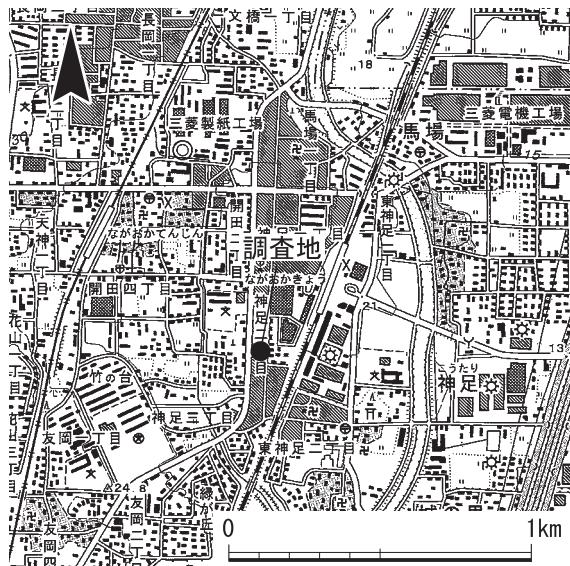
調査概要 調査対象地の北側に1トレンチ、南側に2トレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査地は、全面的に近現代の削平を強く受けているため、遺構の残存状況は良くなかった。特に2トレンチ南半は、遺構面にあたる地層が削平され、基盤礫層まで到達している。

1トレンチ 柱穴8基、溝状遺構1条を検出した。柱穴は、南北方向に3基並ぶもの(柱列1)、東西に2基ないし3基並ぶもの(柱列2)、いずれにも属さない2基に大別できた。これらの遺構は、周辺調査の事例を考慮すれば、長岡京期に属すると考えられる。南北方向の溝状遺構は、埋土に近世陶磁器片が含まれていたことから、近世の畑作に関連する溝と判断した。

2トレンチ 柱穴1基(S P12)、土坑状遺構1基(S X11)を検出した。S P12は、底がわずかに残存しているのみである。S X11は、土師器片や須恵器片が出土したことから、当初は人為的に掘削や埋め戻しが行われていると考えたが、底面が不整合であることや表面上に見えている埋土が地山に対して不規則に貫入していることから、樹木の根痕と判断した。

まとめ 今回の調査では、主として長岡京期に属すると考えられる遺構が確認できた。特に、1トレンチで長岡京期と考えられる柱穴群を検出したことから、周辺に掘立柱建物等の遺構が広がる可能性がある。また、今回の調査成果から、これらの遺構は、東側には展開せず、西側に広がる可能性が高いことが指摘できる。

(面 将道)



調査位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

みのやま 17. 美濃山遺跡第9次

所在地 八幡市美濃山出島他

調査期間 平成31年4月10日～令和2年3月4日

調査面積 4,930m²

はじめに この調査は、新名神高速道路整備事業(八幡京田辺～高槻)に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。同事業に伴う調査は平成27年度(第5次調査)より開始し、5年度にわたる調査を終了した。調査面積も延べ22,630m²に及ぶ広大な面積となった。

美濃山遺跡の東方約400mには、奈良時代の寺院である美濃山廃寺、その下層には、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物群が検出された美濃山廃寺下層遺跡がある。

調査概要 令和元年度の調査地は東・西の2地区に分かれている。両調査区で新たに検出した遺構は、縄文時代と考えられる落とし穴状遺構2基、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物5基・土坑1基、飛鳥時代から奈良時代と考えられる掘立柱建物2棟・道路状遺構1条・土坑4基・溝3条である。そのほか、時期不明の遺構として柱穴・炭窯3基・焼土坑2基を検出した。

道路状遺構は、東西方向に並行する2本の溝からなり、北側溝SD750で67.4m、南側溝SD751が9.1m、SD752で72.0mを検出した。溝は幅1.0～2.2m、深さ0.1～0.3mを測り、溝の間には2.5～3.0mの空閑地がある。この並行する東西溝は、側溝と路面で構成される道路となる可能性がある。

まとめ 落とし穴状遺構の検出から、縄文時代には狩猟場として利用されていたと考えられる。

竪穴建物は、美濃山廃寺下層遺跡が位置する東側の谷を取り囲むように、丘陵縁辺部の狭い範囲に近接して認められた。



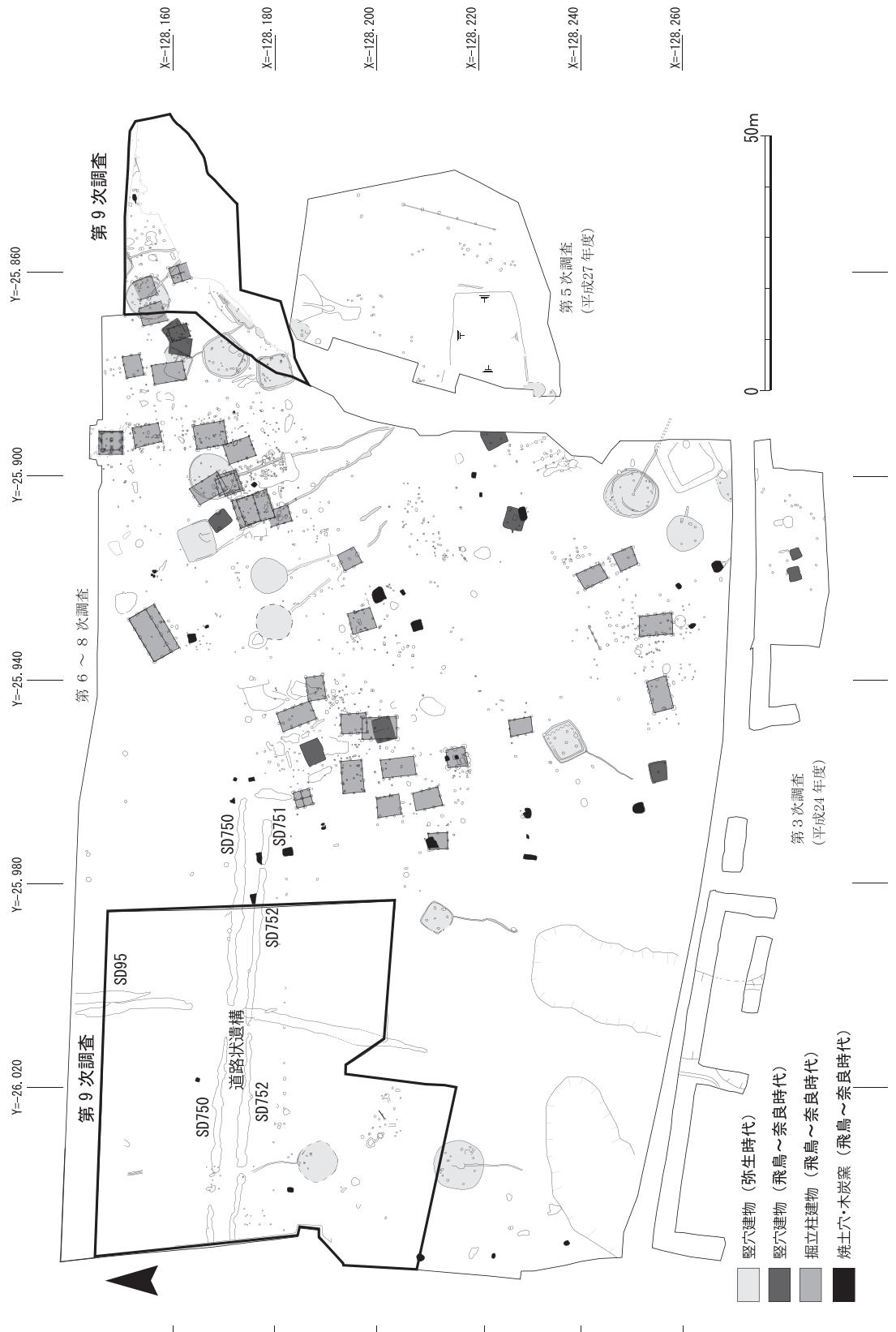
第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)

調査地内の掘立柱建物は、広範囲に4群に分かれて検出された。これらの建物は、重複または近接したものがあることから、建て替えと考えられる。掘立柱建物は、ほぼ南北方向に建てられた梁行2間、桁行3間の小規模なものを中心に、各群に倉庫と考えられる総柱建物が付随することや、飛鳥時代を中心に多数の土馬が出土し、一般的な集落とは異なる様相を示す。鉄器生産が推定される鍛冶津や木炭窯の分布から、鉄製品を生産していた工人の集落の可能性がある。

道路状遺構については、集落への進入路や

排水路とみられる。SD95は道路状遺構とながっていた区画溝の可能性が考えられる。南北方向のSD520・1028については、道路状遺構に先行する集落内の排水溝など、何らかの区画溝と考えられる。

(増田孝彦)



第2図 遺構平面図(1/1200)

18. 小樋尻遺跡第8次

所在地 城陽市富野小樋尻・久保田、寺田島垣内

調査期間 平成31年4月22日～令和元年12月13日

調査面積 2,310m²

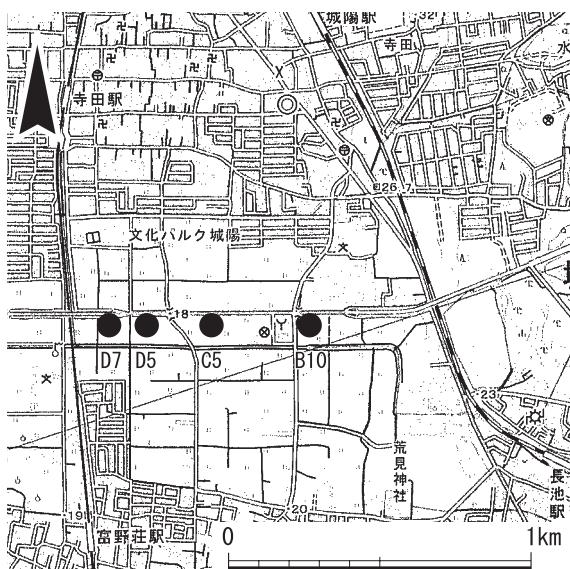
はじめに 小樋尻遺跡は城陽市域のほぼ中央、JR奈良線と近鉄京都線の間に位置している。本遺跡では、中世以降の島畑のほか、中世・古墳時代・縄文時代の集落や流路・溝などが確認されている。今回の調査は、新名神高速道路の建設に先立ち、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。調査にあたっては、4か所の調査区を設定した(第1図)。

調査概要 それぞれの調査区の概要を記す。

B10区 掘立柱建物、柵列、耕作関連の溝を検出した。溝は主として南北方向で、深さは5cm程度と浅く、耕作に伴う溝と考えられる。中世段階のものである。この下層で時期不明の掘立柱建物1棟、柵列1条、流路を検出した。掘立柱建物跡は東西2間以上、南北3間の規模で、建物の西側で2間分の柵列を検出した。また、鎌倉時代後期～室町時代の堆積層が地震によって変形を受けている状況を確認した。慶長伏見地震(1596年9月5日)によるものと推測される。

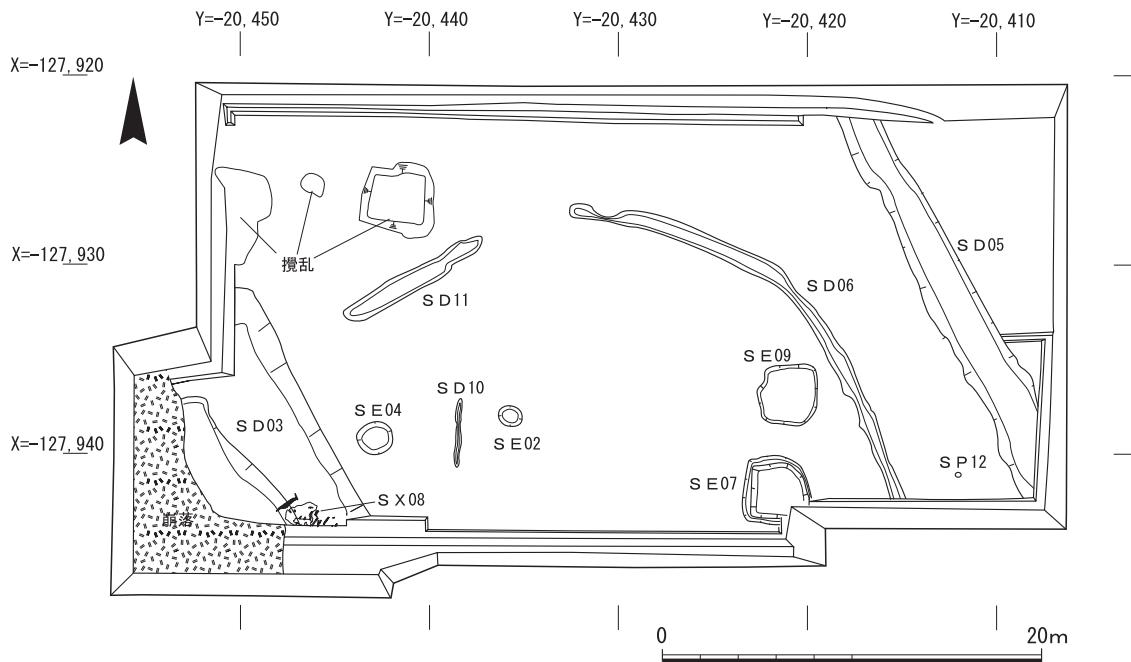
C5区 古墳時代の溝ないし流路3条、敷葉遺構、中世と判断される井戸4基などを検出した(第2図)。中世段階の島畑は確認できなかった。

東辺で検出した流路S D05は幅約2.0～2.5m、深さ約0.6mで、北西から南東方向にかけて、ほぼ直線的に延びている。埋土からは古墳時代前期の土器が出土した。中央部では弧状に巡る溝S D06・11を検出した。溝底は南東から北西に向かって浅くなり、一旦途切れ北東から南西に向かって円弧を描く。幅は0.6～0.9mで、検出長は約38mである。古墳時代後期の土師器・須恵器



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

が出土した。形状から氾濫流路と判断する。調査区の南西で検出した流路S D03は、北西から南東方向に向かって延びるが、西肩は確認できていない。規模は幅7.3m以上、深さ1.4m以上である。流路内南辺部の東側斜面の下層では、杭が打ち込まれた藁状の植物を敷き詰めた遺構(S X08)を検出した。いわゆる敷葉工法とされる軟弱地盤を改良するための工法と考える。流路S D03の最上層からは古墳時代後期の須恵器、下層からは古墳時代前期の土師器が出土しており、幅を狭めながらも長期間にわたって存続していたものと推測さ



第2図 C5区検出遺構配置図

れる。

井戸 S E 02・04・07・09は、掘形の一辺が1.2~3.2m、深さは0.5~1.5mを測り、側面の壁がほぼ垂直に立ち上がっている。周辺で集落関係の遺構が見つかっていないことから、耕作に伴う水溜井戸と考えられる。内部より微細な瓦器片が出土しているだけである。また、この調査区でも、B10区と同じく、地震によって変形を受けた土層を確認した。

D5区 調査区は南北約20m、東西19.7mで、島畠1基、島畠間の溝、素掘り溝、流路を検出した。島畠は南北方向のもので、地山を削り出している。島畠上面と島畠間の溝部との比高は約0.7mである。島畠の上面では素掘り溝と考えられる南北方向の小溝を検出した。また、調査区壁面の観察で、中世の島畠上に重なるように近世の島畠が作られている状況を確認した。島畠の下層では、時期不明の流路を検出した。

D7区 調査区は東西17m、南北20.9mで、島畠、島畠間の溝、素掘り溝を検出した。島畠は南北に主軸をもち、地山を削り出して作られている。島畠上面と溝部との比高は最大で0.5mである。島畠上面では南北方向の素掘り溝を検出した。島畠の調査が終了した後、下層の確認を行ったが島畠以前の遺構・遺物は確認できなかった。

まとめ 今回の調査成果と過去の調査成果を突き合わせると、中世島畠の分布範囲が明確となり、城陽市内の低地における土地利用の違いが明らかとなってきた。B10区より東とC5区周辺では島畠が造られていないのに対して、それ以外の地区では島畠が造られているようだ。島畠が認められないB10区以東とC5区周辺では、16世紀末の慶長伏見地震が原因と推定される地層の変形が広く確認されている。この地層の変形は湖沼の中もしくはそれに近い湿地内といった環境下で生じると考えられるため、そういった土地環境が島畠造成の可否に関係している可能性がある。

(岩松 保)

19. 小桶尻遺跡第9次

所在地 城陽市富野久保田、寺田島垣内

調査期間 令和元年5月30日～令和2年2月27日

調査面積 2,020m²

はじめに 小桶尻遺跡第9次調査は、国道24号寺田拡幅事業に係わるもので、D10区、D11区、C6区の3か所で実施した(第1図)。国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。

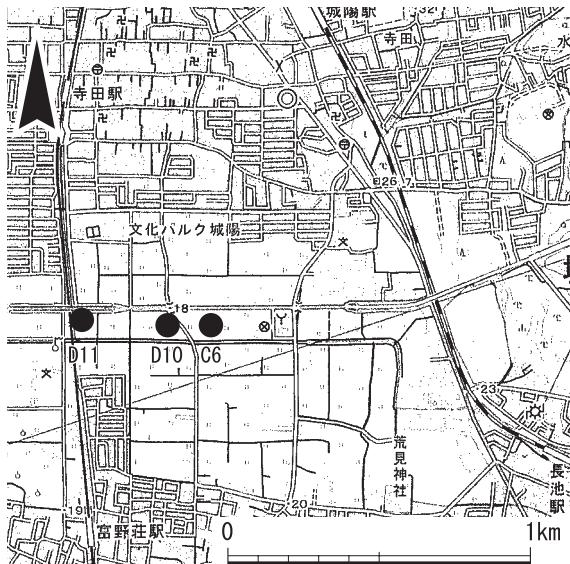
調査概要 以下、調査の概要を記す。

D10区 南北方向の島畠1基、井戸3基、柱穴約20基のほか、南西から北東方向の自然流路を検出した。3基の井戸は島畠の西端部にあり、埋土から13～14世紀の瓦器・土師器・輸入陶磁器片などが出土し、1基からは完形の瓦器や土師器が多数出土した。柱穴群は全て円形の掘形で、遺物の出土はなく、時期は不明である。建物跡に復元できるものはない。自然流路は島畠が廃絶した後の流路であるが、出土遺物はなく時期は不明である。

D11区 調査により、南北方向の島畠1基および島畠上で南北方向の素掘り溝、東西溝を検出した。また、島畠造成以前の溝を検出したが、時期は不明である。氾濫流路と考えられる。

C6区 調査区は、D10区と城陽市道11号を隔てた東側に位置し、南北約12m、東西約100mを測る。調査の結果、島畠は無く、古墳時代の流路・溝跡、中世の土坑、時期不明の耕作関連の小溝群などを検出し、その下層で湿地内の堆積土層と流路の層序を観察した(第2図)。

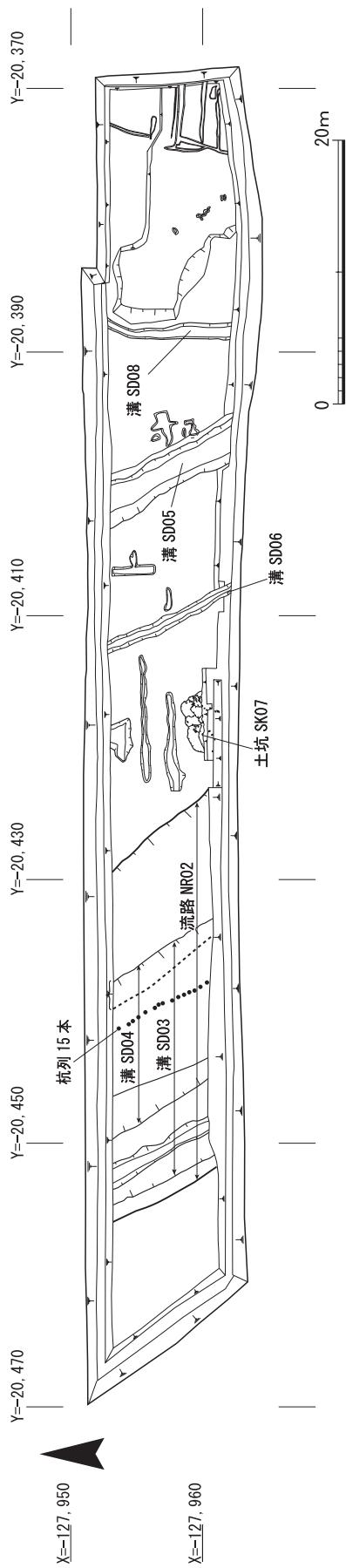
調査は中世の島畠を検出するべく重機で表土掘削を行ったが、同時期の遺構・遺物が認められず、古墳時代の遺構・遺物が分布する面からの調査となった。慶長伏見地震による地層の変形が



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

調査区の壁面のほぼ全面で認められたことから、中世段階には湖沼の中もしくはそれに近い湿地であったため、土地利用が制限されていたと判断される。

調査区東端・西端では細砂が分布する平坦面があり、東端部では素掘り溝と判断される小溝群を検出した。古墳時代以降の遺構としては、溝 S D03～06・08、土坑 S K07などがある。溝 S D05は幅約4m、深さ約1mで、古墳時代前期の土器片がわずかに出土した。溝 S D06は幅約1m、深さ0.4mである。溝 S D08はほぼ南北方向に直線的に掘削されてお



第2図 C6区検出遺構配置図

り、古墳時代前期の土器片が出土した。土坑SK07は南半が調査地外に延びるが、検出した範囲では平面円形を呈し、直径約5m、深さ約1.6mを測る。内部には長さ2m程度の丸太杭が南北方向に2列に打ち込まれていた。埋土から中世の土師器片が出土した。用途は不明である。西半部では、溝SD03・04を確認した。溝SD03は幅約20m、深さ約1mで、完形に近い古墳時代前期の土器が溝の西側から廃棄された状態で出土した。溝SD04は古墳時代後期の遺物を含み、幅約10m、深さ1.2mで、溝SD03の底面を掘り込んでいた。溝の東肩部には杭列が設けられていた。

最終的に、東西の平坦面間の65~70m分を断ち割り、土層観察を行ったところ、溝SD03~06・08を検出した範囲全体が湿地であったことが判明した。湿地内には、厚さ1~1.5mで砂礫と砂、シルトが堆積していた。堆積時期の上限を示す遺物はない。この湿地がほぼ埋没した後に幅約30m、深さ約2mの流路NR02が形成され、その最終段階が古墳時代前期~後期の溝SD03・04である。流路NR02の時期を示す遺物の出土はないが、自然木の放射性炭素年代は弥生時代後期である。

まとめ C6区では、平坦地(微高地)と平坦地(微高地)の間が湿地となっており、徐々に陸地化しながらも、弥生時代後期~古墳時代後期に至るまで流路・溝が形成されていた。この流路の西側から土器が廃棄された状態で出土したことから、C6区の西側には当該期の集落が広がっている可能性がある。また、C6区の調査成果から、その集落は中世まで存在した可能性が指摘できる。

C6区の東端で検出した平坦地(微高地)の北側で昨年度に調査したC4区では、この微高地を掘り込んだ溝もしくは崖面から縄文時代晩期の土器片が多数見つかっている。このことから、この微高地は縄文時代以前に形成されたと推定され、同時期の遺構が遺存している可能性があるとともに、その西側に分布する湿地もまた縄文時代にまでさかのぼる可能性がある。

(岩松 保)

20. 水主神社東遺跡第12次

所在地 城陽市寺田大畔・金尾地内

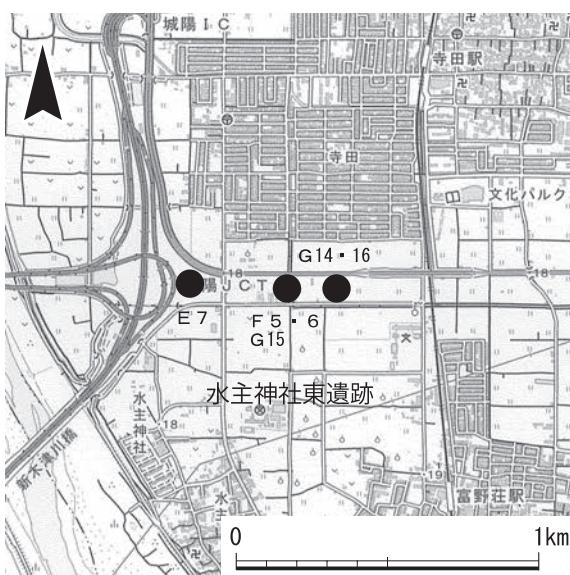
調査期間 令和元年5月15日～令和2年2月27日

調査面積 7,350m²

はじめに 水主神社東遺跡は、城陽市のほぼ中央部の木津川右岸に位置し、木津川により形成された沖積平野部に立地する。これまでの周辺の調査で、弥生時代後期から古墳時代前期の溝や中世以降の島畠群が確認されている。今回の調査は、国道24号寺田拡幅事業に先立ち、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受け、発掘調査を実施したものである。令和元年度はE・F・Gの各地区で調査を実施した。

調査概要 E地区(E 7)では、南北方向の島畠3基を検出し、島畠上面の耕作溝から中世の土師器皿などが少量出土した。島畠の下層では、弥生時代後期～古墳時代前期の南北溝2条とそれらと直交する東西溝2条を検出した。他に、古墳時代前期の土器が出土した落ち込みを2基検出した。

F地区(F 5・6)では、東西方向に約7m間隔で並ぶ島畠を4基検出し、島畠の下層では古墳時代前期の溝6条と縄文時代の流路1条を検出した。縄文時代の流路は南北方向に緩やかに蛇行し、検出長約42m、幅約8～11m、深さ約2.3mを測り、断面は箱形を呈する。流路は複数回の木津川の洪水流が掃流する際に浸食されて形成されたものであり、形成後は水が緩やかに南から北に流れていると考えられる。流路の埋土は、葉理を形成した砂層と木材、葉、種子、炭化物などを多量に含む泥炭層である。理化学分析の結果、種子はイチイガシ、ムクロジ、オニグルミやトチノキなどの堅果類であり、木材はカシ類などの広葉樹材が大多数を占めていた。これらの植



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

物遺体は近隣の植生が洪水に巻き込まれ、埋没したと考えられる。流路埋土の上層では、縄文時代晩期の土器が出土した。下層では礫を伴う木組み遺構、木道、杭列の他に丸木材や加工木と縄文時代後期から晩期の土器を検出した。流路の西辺で検出した礫を伴う木組み遺構は、全長2.7m、幅0.5～0.8mを測り、平面台形状を呈する。丸木材と割材を縦に並べて置き、横木を渡した後に短辺に数本の杭を打ち込んで固定していた。木組みの内部では径10～20cmの礫を全面で検出し、礫を取り上げた後に長さ約1.8m、幅約0.4mの板材を検出した。

た。礫を伴う木組み遺構の南側で検出した木道は、長さ3.5m、幅0.4~0.7mを測る。分割した丸木材の平坦面を上にして置き、平面は方形で断面は半円形を呈する。礫を伴う木組み遺構へ向かう足場と考えられる。木道は亀裂や劣化がみられ、水に浸かった状態ではなく乾燥状態で使用されていたと考えられる。流路の



写真 繩文時代の流路における木組み遺構(北から)

北東部で検出した杭列は、割材を小径木の杭で留め、平面を「ハ」字形にし、流路と並行して設置していた。周辺からも杭を検出しておおり、一連の構築物と考えられる。丸木材は流路中央部分で検出し、全長約10mを測る。両端部は割り裂きによって尖端形を呈する。割り裂き痕の他に、枝を払った痕跡や樹皮側を調整した加工痕が認められる。木材の劣化がほとんどないため、水浸かりの状態であったと考えられる。丸木材は流路に直交するように設置されており、水流を受けるような構造材であったと考えられる。丸木材の南側で加工木を検出した。丸木材を半裁し内部を削りぬき、東端は舳先状に加工され、長辺の両側端は平坦に加工されていた。西端は折れて割れたような状態で、遺存する長さは約2.1m、幅は約0.4mある。これらの木製構造物は、流路の流水を利用して作業を行った遺構と考えられる。また、礫を伴う木組み遺構の周辺からは、石器の剥片や加工した木材片などが出土している。

G地区(G14・15・16)では、南北方向の島畑6基と東西方向の島畑2基を検出した。また、島畑が南北から東西方向に変わる間で方形の土坑(東西約3.6m、南北約4m、深さ約50cm)と土坑の南西角に隣接して不規則に並ぶ9本の杭列を検出した。島畑の下層では、並行して北西から南東方向に延びる古墳時代前期の溝2条と、北西から南東方向に延びる縄文時代の流路1条を検出した。

まとめ F地区で検出した流路やその周辺は、縄文人たちがクリやトチ、イチイガシなどの木の実の採集や流水を利用した作業を行う生活の場所であったと考えられる。近年の調査成果から、縄文時代後期から晩期の木津川中流域の低地部で、縄文人たちが点在する微高地を集落域として、木津川の氾濫で生じた自然流路を巧みに利用していたことを知る貴重な成果となった。

(小泉裕司)

21. 水主神社東遺跡第13次

所在地 城陽市寺田金尾

調査期間 令和元年11月18日～令和2年2月14日

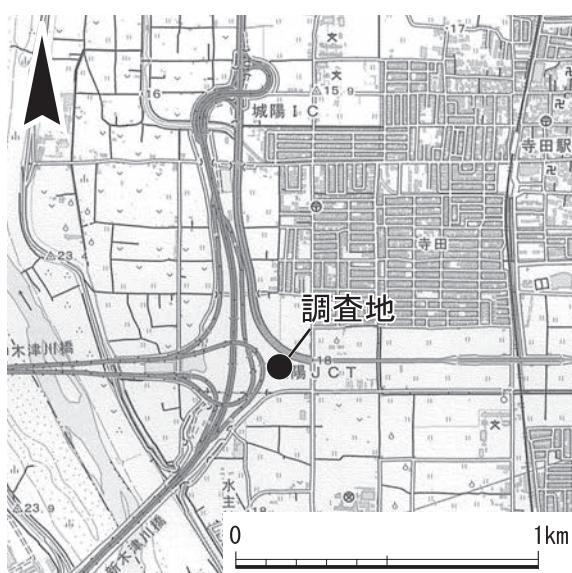
調査面積 520m²

はじめに 水主神社東遺跡は、城陽市域である木津川右岸の近鉄京都線から城陽ジャンクションにかけての場所に位置している。これまでの調査では中世以降の島畠が広範囲で検出されている。また、飛鳥時代の柱穴や井戸、弥生時代から古墳時代にかけての溝、縄文時代の流路なども検出されている。今回の調査は、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査地は、城陽ジャンクションのすぐ東側の場所である。ここでは新たに整備される国道24号を南北に跨いで、新名神高速道路の橋脚が予定されており、北側の調査区をE 6 a区、南側をE 6 b区とした。なお、両調査区の間でも国道24号整備事業としてE 7区を設定し、並行して調査を実施している。調査の結果、島畠、島畠間の溝、耕作溝、流路などを検出した。

E 6 a区は小さな調査区であるため、調査区内の全てが島畠間の溝S D01にあたる。S D01の底面では、耕作に伴う溝と考えられる南北方向の小溝を複数検出した。

E 6 b区では、島畠2基と島畠間の溝S D01を検出した。島畠は基盤層を削り出して造ったもので、どちらも南北に主軸方向をもっている。島畠1の上端の幅は6.8mである。島畠上面では、耕作に伴って溝と考えられる南北方向の小溝を複数検出した。島畠の年代を示す遺物の出土は少ないが、周辺での調査の成果から12～13世紀のものとみられる。島畠上面での調査終了後に島畠を面的に下げた結果、下層にあたる流路(S D06・19)を検出した。また、島畠間の溝S D01の底面でも流路S D05を検出した。これらの流路は埋土に砂を多く含む層が存在することから、木津



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

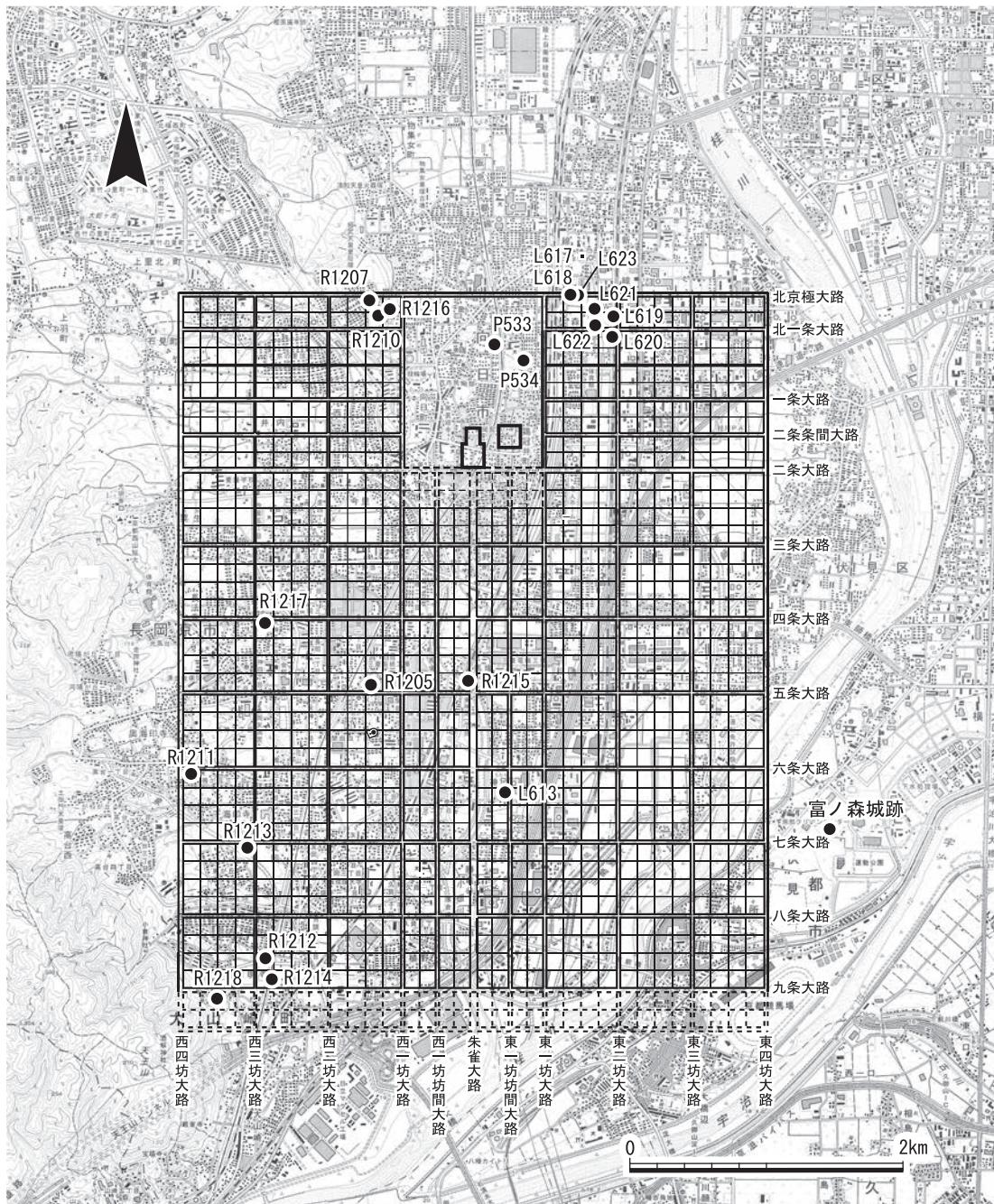
川の氾濫に伴って形成されたものと考えられる。いずれの流路からも遺物はほとんど出土しなかったが、過年度の調査においてS D05・06の続きを検出しており、弥生時代後期～古墳時代の遺物が出土している。

まとめ 今回の調査では島畠とその下層にあたる流路を検出した。島畠は基盤層を削り出して造られており、流路はその基盤層に覆われている。つまり木津川右岸に広がる中世島畠が造られる基盤層は、弥生時代後期～古墳時代以降に形成されたものである。

(加藤雅士)

長岡京跡の発掘調査は広域にまたがることから、向日市、長岡京市、大山崎町、京都市及び京都府の発掘調査機関が集まり、発掘調査に関する情報などの共有化のため、月に一度、当調査研究センターにおいて長岡京連絡協議会を行っている。

なお、令和2年4月から6月までの協議会については、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、資料提出による報告によって情報の共有を図った。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京城、Lが左京城を示し、数字は次数を示す。

ここでは3月から6月までに報告のあった、宮域2件、左京域8件、右京域11件、その他1件の発掘調査のうち、主なものについて報告する。

宮域 2件の調査のうち宮第533次調査では、宮内一条条間北小路の南北両側溝と宮内東一坊坊間西小路の東西両側溝が検出され、宮内道路の施行状況が明らかになった。

左京域 8件の調査のうち、左京第617・618次調査は共に左京北一条二坊四町内にあたり、第617次調査では中世の南北溝を、第618次調査地では長岡京期の溝を検出した。

左京第619次調査では、長岡京期の遺構として北一条条間南小路南側溝のほか柱穴や流路を検出した。流路からは長岡京期の土器と共に円座が出土した。また、下層では弥生時代中期の方形周溝墓の周溝とみられる溝を検出した。

左京第620次調査では、長岡京期の柱穴1基を確認した。調査区北端部に北一条大路南側溝が想定されたが、改修以前の寺戸川の攪乱により検出されなかった。

左京第621次調査は、北一条条間南小路の推定位置にあたる。調査ではこの道路を横断するよう北東から南西に流れる流路が検出され、墨書人面土器・土馬・ミニチュアカマド・ミニチュアナベ等の祭祀遺物が出土した。体部に「神明膏」と記された須恵器鉢D等が注目される。

右京域 11件の調査のうち、右京第1205次・開田遺跡の調査では、長岡京期の五条大路北側溝、平安時代中期～後期の掘立柱建物群、平安時代末～鎌倉時代初期の小穴群や集石遺構を検出した。平安時代中期～後期の掘立柱建物群には廂を持つ建物があり、柱穴列からは綠釉陶器や瓦が出土した。出土した瓦には仁和寺出土瓦と同型のものがあり、仁和寺開田院との関連も想定されうる。

右京第1207次調査では古代の盛土遺構と中世の土坑状遺構を検出した。前者は宝菩提院廃寺瓦窯跡に関するもので、後者からは戦国時代の土器が出土した。

右京第1210次調査は、宝菩提院廃寺の南端部にあたり、近世宝菩提院の再興に関わる遺構を検出した。

右京第1212次調査では、奈良時代の土坑やピットを検出した。

右京第1213次調査は、右京八条四坊一町にあたり、奈良時代末～長岡京期の溝や柱列、製塩土器の集積遺構を検出した。

右京第1218次調査は、右京九条三坊および円明寺跡に当たる。調査では中世の土坑やピットを検出した。

その他 長岡京域外ではあるが、京都市富ノ森城跡の発掘調査が実施されている。

(松尾史子)

現地公開状況・普及啓発事業(令和2年度上半期)

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

しかし、今年はじめから全世界規模で猛威を振るった新型コロナウイルスへの感染拡大防止のため、当初、今年度前半に予定していた現地公開や埋蔵文化財セミナーの開催を見送り、今後の情勢の推移によって、これらを実施することとした。

当該期間中に実施した普及啓発事業としては、令和2年6月12日から同16日にかけて、京都府庁2号館1階のロビーで「京都府庁を掘る」と題したロビー展示を開催した。展示期間は短かったものの、平成30年度・令和元年度に実施した京都府庁内の発掘調査の成果をコンパクトにまとめもので、平安時代から近代までの遺物を展示し、調査成果をパネルで紹介した。

また、例年実施している「関西考古学の日」は、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックに属する12法人が、広く市民の方々に文化財や考古学の重要性などを知っていただくために、7月から11月の5か月間に考古学に関連した行事を実施する連携事業である。しかし、「関西考古学の日」関連事業についても新型コロナウイルスの終息が見通せないため、今年度の全事業を断念し、今年度については開催しないことが決定された。

なお、今年度は、当調査研究センターの設立40周年にあたるため、例年、開催している「発掘された京都の歴史」は開催せず、当調査研究センター設立40周年記念展覧会「動乱の世から太平の世へーかわりゆく人々のくらしー」を京都府京都文化博物館において令和2年12月12日(土)から令和3年1月31日(日)までの期間で開催する予定である。また、本展覧会に合わせて設立40周年記念講演会を令和2年12月6日(日)に京都産業会館ホールにおいて計画している。詳細については、当調査研究センターのホームページ上に随時公表していくので、ご確認いただきたい。

(筒井崇史)

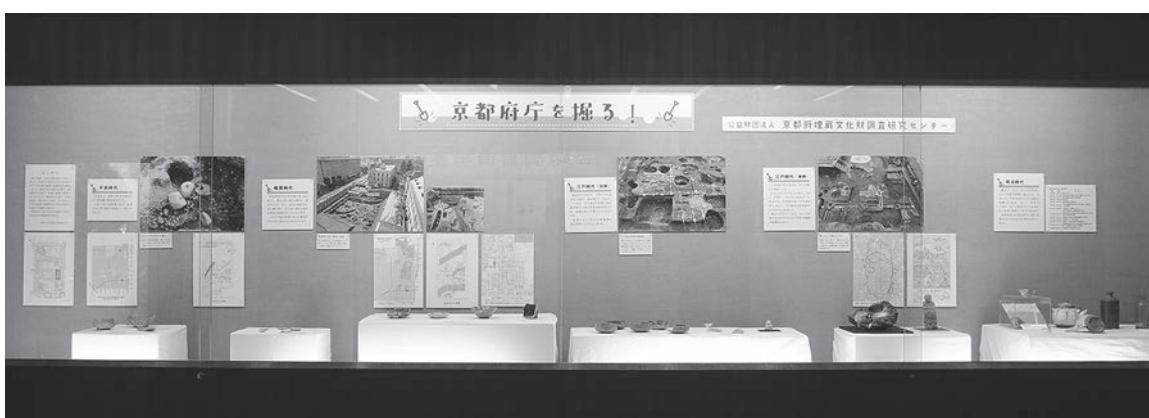


写真 ロビー展展示状況

センターの動向 (令和2年3月～令和2年7月)

- 3 4 新名神美濃山遺跡(八幡市)現地調査終了(4月10日～)
8 「スライドでみるおとくにの発掘」(於：大山崎町)※
9 平安京跡(京都市)現地調査終了(4月16日～)
10 令和元年度第2回全埋協会近畿ブロックコンピュータ等研究委員会(於：八尾市)※
12 国道423号犬飼遺跡(亀岡市)現地調査終了(5月15日～)
18 第33回理事会(於：京都市)、長岡京連絡協議会
19 国営亀岡金生寺遺跡(亀岡市)現地調査終了(4月17日～)
31 辞令交付式
4 1 辞令交付式
20 新名神小樋尻遺跡(城陽市)現地調査開始
22 長岡京連絡協議会※
28 国道24号寺田拡幅小樋尻遺跡(城陽市)現地調査開始
5 7 新名神芝山遺跡(城陽市)現地調査開始
8 国営亀岡金生寺遺跡(亀岡市)現地調査開始
14 国道423号犬飼遺跡(亀岡市)現地調査開始
15 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(一斉メールにて実施)
27 長岡京連絡協議会※
28 監事監査
6 1 稚児野遺跡(福知山市)現地調査開始
N P O京都観光文化を考える会・都草講演会(於：京都市)※
8 河川改修犬飼遺跡(亀岡市)現地調査開始
9 第35回理事会(書面にて開催)
11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(オンライン会議)
12 令和2年度第1回全埋協近畿ブロック主担者会議(於：八尾市)※
府庁ロビー展「京都府庁を掘る！」(於：京都府庁、～16日)
24 長岡京連絡協議会※
第11回評議員会(於：京都市)
7 1 辞令交付式
22 長岡京連絡協議会※

※印 新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

編集後記

新型コロナウイルス感染拡大防止のため新しい生活様式のもと、暑さを感じる季節になりました。ここに、『京都府埋蔵文化財情報』第138号が完成しましたので、お届けします。

本号では、昨年度の調査成果13件、共同研究報告1本のほか、職員の日ごろの研究成果を紹介する論考1本、研究ノート2本、資料紹介を1本掲載しました。ご味読いただければ幸いです。

なお、当調査研究センターは、令和2年度で設立40周年を迎えます。記念事業として、展覧会や講演会などを計画していますので、奮ってご参加下さい。

(編集担当 松尾史子)

京都府埋蔵文化財情報 第138号

令和2年8月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER